

「牧羊者」との出会い

塩尻教会 佐伯 修一



わたしがきたのは、羊に命を得させ、豊かに得させるためである。

ヨハネ10・10

新年度、新学期が始まりました。今年度も「牧羊者」が、幼い子どもから、学生、社会人、高齢者に至るまで、すべての世代に豊かな霊の命を与え続ける教案誌として用いられますようにと心からお祈りいたします。

私が初めて「牧羊者」に出会ったのは、ちょうど40年前の一九七九年でした。私は大学4年生で、京都聖徒教会の高校の教師に任命されました。隔週でメッセージと司会を担当し、毎週の分級はもう一人の兄弟と一緒に奉仕をしました。大学1年の夏に受洗して2年半ほどで、まだ聖書について人に教えるほどの知識もないような未熟な状態でした。毎週、「牧羊者」を開き、その週の聖書箇所を読んで、必死で高校の準備をしたことを思い出します。クリスマス

の祝会で、「牧羊者」に載っていた「靴屋のマルチン」の劇を、中高生たちと一緒に準備し、上演したことも楽しい思い出です。礼拝や祈禱会の説教からの学びももちろんですが、高校で生徒たちに伝えるために「牧羊者」を用いて準備することによって、自分自身の聖書理解が深まり、たいへん恵まれました。

20年ほど日本を離れ、キリスト教のリソースの豊かな北米で英語の教材を使って僻地のネイティブアメリカンやイヌイットの子どもたちと教会学校を持った時もありました。しかし、10年前に帰国し、再び「牧羊者」と共に今日まで常に歩んでまいりました。

「牧羊者」第一号が発行されたのが一九五二年6月と聞いています。各時代の諸先輩方の祈りと愛のご奉仕によって、今日まで「牧羊者」が継続して発行されています。事は神様の大きな恵みだと思えます。委ねられた羊を養い育て、豊かな命を与える働きのために、「牧羊者」がますます用いられますようにと心からお祈りいたします。

牧羊者

目次

巻頭言	1
目次	2
教師養成講座「若者を救いに導き、守り、育てる 異端・カルトに惑わされ、だまされないための予防と対策」	3
受難・復活	4 / 7 / 5 / 12
新しい生き方	5 / 19 / 6 / 2
教会の歩み	6 / 9 / 6 / 30
牧羊ひろば（天授ヶ岡教会）	89
カリキュラム	94
カリキュラム解説	95
「牧羊者」のご購読・ご利用について	96
おわりに	96

〔凡例〕

1. 原語について：ギリシヤ語は〔ギ〕、ヘブル語は〔ヘ〕、アラム語は〔ア〕で表記しています。
2. 礼拝メッセージ例の最後の「さんび」の略記について
こ：「こどもさんびか」、こ改：「こどもさんびか改訂版」（以上、日本キリスト教
団出版局）、ホ：「教会学校・日曜学校 子どもさんびか」（日本ホーリネス教団出
版局）、イン：「教会学校さんびか」（インマヌエル教会学校部）、ふ：「ふくいん子
どもさんびか」、GS：「ふくいんこどもさんびか2 グローイング・ソング」（以
上、日本児童福音伝道協会）、PW：「プレイズワールド」（リビングブレイズ）

若者を救いに導き、守り、育てる

『異端・カルトに惑わされ、だまされないための予防と対策』

教団異端・カルト研究室長

横浜栄光教会

小岩裕一



愛する者たちよ。それだから、あなたがたはかねてから心がけているように、非道の者の惑わしに誘い込まれて、あなたがた自身の確信を失うことのないように心がけなさい。(Ⅱペテロ3・17)

はじめに

クリスチャンホームの若者や、若い求道者が教会に少なくなっている現状で、その若者を救いに「導き」、「守り」、「育てる」ことが急務となっています。

「守り」とは、福音を聞き、救いに導かれる若者が、その福音から逸脱^{いつだち}して、異端やカルト集団に惑わされ、だまされてしまうことを防止することです。聖書には、

異なる教えや、不健全な教えに対する警告が随所にあります。今回の講座では、惑わされ、だまされている実例の一端を紹介します。そして、予防と対策を考えてみましょう。

大学生の被害

異端・カルト集団には優秀で高学歴な人が多いのは当然です。それは「集中的・継続的」に、「ダミーサークル」を活用して「密かに隠れて」大学のキャンパスに侵入して勧誘しているからです。いつのまにか、気がつかないで被害者となります。次に他の大学生を「楽しく有益なサークル」として勧誘する加害者となります。人を惑

わしだましているという自覚はありません。真剣でまじめで、熱意があり魅力的な人に見えます。

集中的に勧誘する時期は、入学式から5月の連休です。ある大学の学生担当教授に実態を伝えましたが、「カルト対策のパンフレット配布や警告の掲示はするが、それ以上はできない」との回答でした。現実には「野放し状態」のようです。そうであるならば、自分で自分の身を守るしかありません。

他大学との「合同サークル活動」の名目で、異端・カルト集団が入っていることが増えていきます。他大学や地域社会にもキャンパスを解放するのはよいことですが、異端・カルト集団にとっては絶好の勧誘場所です。「サークル活動」の名目は、音楽、スポーツ、芸術活動、留学、ボランティア、就職活動など大学生が興味関心を示すありとあらゆる分野です。また、レベルの高い内容を提供しますので、怪しまれないようです。

「個人的」に親しくなると、サークル活動に誘う口です。その際、すぐに異端・カルトの施設に連れて行くのではなく、お互いの学生のアパートが交流の場となり、友人を紹介され、食事会や楽しい歓談の時を持

つのです。すぐに、異端・カルトの教理の学びをしたり、異端・カルトの集会に連れていくこともあります。今は、強制的なことや無理なことはしないで、長期間に亘^{わた}って人間関係を深めます。

「シェアハウス」で同居した親友が、後になって異端・カルト信者になっていたことがわかった実例もあります。

「世界統一平和家庭連合」(旧統一協会)、「キリスト教福音宣教会」(摂理)の偽名のサークル活動が多数あります。「末日聖徒イエス・キリスト教会」(モルモン教)の「外人」(ネイティブ)による「無料英会話教室」も全国各地にあります。

大学・専門学校に入学する若者や、一人暮らしをする若者に、異端・カルト集団の存在と、その「巧妙な勧誘の手法」を事前に伝えておく必要があります。

高校生の被害

高校生の被害のほとんどは、高校時代の部活の先輩からの勧誘です。部活(サークル)は運動部に限らず、音楽、旅行、受験、ボランティアなどです。

大学二年時に入信し、親に発覚した例です。異端・カルト信者となった先輩が高校の部活指導に来て（部活の先生も安心している）、卒業後、その先輩と同じ有名大学に入学し勧誘されました。その先輩も同じように高校の部活で異端・カルト信者の先輩との接触があったのです。この高校では同じような例を複数確認しました。「芋づる式」の勧誘です。後でこの被害を知った親も高校の先生も「手の施しようがない」と言っていました。

高校生向けの「オープン・キャンパス」から異端・カルトの接触が始まっています。ラインなどのアドレス交換をしておくだけでも、入学後の勧誘につながるのです。また、現役高校生向けの受験サークルもあり、ネットで募集しています。

大学入学後、異端・カルト集団に入り途中で気づいたある大学生は、高校の進路指導で「卒業後、カルト、違法商法には気をつけるように」と聞いたことを、かすかに覚えていて、「今、自分がいる所は、ひょっとしたら、カルト?」と気になり、すぐにネットで調べて、カルトであることがわかり、相談にきました。

中高生バイブル・キャンプで「異端・カルト対策」の

話をした後、ある高校生から「私は、その異端の教祖の写真に見覚えがある」と言われました。親友（異端信者二世）から誘われて、キリスト教会と思って、異端の教会に行っていました。

高校の時に、異端・カルトの情報を少しでも知っていると、実際に接触した時に「センサー」が働くようです。全く知らないと思われてしまっています。教会でも、高校卒業前に、自分の身を守るために、異端・カルトに関するの情報を提供する必要があるようです。

よく知らない他団体、集会、教会に行く場合は、必ず確認することが必要です。「団体名・集会名・教会名」だけで、異端・カルト教会の判断をするのは難しくなっています。断定できなくても、「お勧めできない」こともあります。

かつては、異端・カルト対策は大学生でしたが、今は、高校生からです。

悪魔が勝利するゲームで混乱した中学生

「ネット依存」と思われる未信者家庭の中学生がいました。親はゲームから離れられるならばと、教会のキャ

ンプを許可し参加していました。そのゲームは、必ず、悪魔の勝利で終了します。彼は「遊び」だからと割り切れず、何をしても悪魔の勝利で終わることが怖くなりました。憂鬱になり、生きる意欲がなくなり、引きこもり、学校にも行けなくなりました。

「先生、ほんとうに、最後は悪魔が勝利するんですか」と聞かれ、キャンプ中でしたが、別室でゆっくりと、聖書から悪魔は敗北と滅びで終わり、神と主イエス・キリストの勝利で終了することを伝えました。真剣に聞いてくれて、「よかった」とほっとしていました。

霊界ゲームだけではなく、オカルト的ゲーム、残酷な人殺しゲームなどもあります。ゲームとはいえ、写実的な描写で「リアル感」（現実感）があります。

中高生の時「遊び」とどまらず、その人の宗教的な思想となり、支配してしまう怖さを感じました。心理的に不健全で、霊的にも悪霊の働きを否定できません。

占いにとりつかれてしまった女子

タロット占いを興味半分ではじめ、自分でも「よく当たる」と感じたそうで、タロット占いのプロの先生に教

えてもらい、友だちの運勢も占うようになりました。あまりにもよく当たるようになり（？）、怖くなったそうです。それまでは楽しかったそうですが、その恐怖心に支配され止めようとも思いました。しかし、タロット占いを止めたら、もっと恐ろしいことになると思ったそうです。混乱し、外出もできず心身共に疲労してしまいました。電話での相談が入り、何とか教会まで来てもらいました。

聖書から、占いは罪であることと、占いに頼る必要はなく、神により頼むことを伝えました。数回のお話で整理ができ、近くのキリスト教会を紹介しました。

テレビ、雑誌、電車広告、ネットでも多種多様な占いが紹介されています。クリスチャンでも、占いや方角、運勢を気にしている人は20%という統計があります。聖書信仰に立つならば、全く気にすることはないのですが、日本人クリスチャンの弱さがあらわれているのでしょうか。

「霊界」と通信する女子

ある女子が「霊界と通信ができる」と言った時、アニ

メかゲームの話としました。「ほんとうなの?」「ほんとうです! うそじゃありません。信じないんですか」「そうなんだ」と、その子の「体験」を受け止めながら、話を聞きました。頭から否定することや見下げる態度は、敏感に感じて、心を閉ざします。同じように霊界との通信をする友人もいるそうです。また、ネットには霊界との通信のやり方も紹介され、本も出版されています。他の友だちからも「少し変わった子」と見られて、孤立しているようです。また、その本人の性格や生育、家庭環境に深刻な問題がありました。このような悩みから、「霊界」に逃避しているように感じます。継続的な霊的、心理的、社会的なケアが必要でしょう。

聖書から、霊界との通信は「偶像礼拝の罪」であることを理解してもらい、唯一まことの神と救い主イエス・キリストを信じる信仰を持つことを話す必要があります。

この女子だけではなく、今は「霊界」がアニメ、映画、ゲームなどで頻繁に描かれ、「おなじみの世界」となっています。世の中では「霊界」を信じている人、半信半疑の人、遊び半分の人がいて、きっぱりと否定する人は少ないのではないかと思います。

クリスチャンの若者も主イエス・キリストを信じた後、聖書以外の霊界の存在や霊界への通信・交流などに「気軽に、遊び半分」で接し続け、信じていた福音理解が歪んでしまわないか心配な面があります。聖書に啓示された天国と、天国への道は、キリストだけを信じる信仰が大切です。その確信が曖昧になり、「偶像礼拝の罪」の悪影響を過小評価してはいけません。

このような時代だからこそ、映画、アニメ、ゲームからこの問題を真正面からとりあげ、教会学校教師と生徒が一緒に考えてみる大切ではないかと思っています。おそらく、クリスチャンの若者は「しっかりしてるな」と安心する面と、「大丈夫かな」と心配な両面があるのではないかと思っています。若者たちがこのような現代の宗教的事情を聖書によって理解し、なおいっそう信仰が確かなものとなれば、さいわいです。

聖句参照 申命記18・9〜14、ガラテヤ1・6〜9、Iヨハネ4・1〜3、Iヨハネ5・19、黙示録20・10

ネット情報を鵜呑みにする危険

クリスチャンの若者も、聖書の疑問は、教会学校の先

生や牧師に聞く前に、ネット検索します。有益な情報もありますが、異端・カルト集団のホームページにつながることもあります。異端・カルト側も、ネットにおける勧誘を最も効果的な手段として、ビジュアルな画面で、頻繁に更新しています。^{ひんぱん}「キリスト教」を自称し、若者が多く集まり、魅力的なイベントが次々と行われています。宗教活動だけではなく、震災ボランティアや海外にも進出して国際交流も盛んです。異端・カルトだと知らなければ、魅力に感じ、行ってみたいと思う内容です。このことは若い人に伝えて、注意を促しておく必要があります。

また、キリスト教信仰にとって大切な「終末論・再臨論」に関しても、多くの情報や説教を検索できます。しかし「玉石混合」で、極端な教理解や、既成キリスト教批判の情報も多数あります。キリスト教の情報でも、そのまま「鵜呑み」にしないで、牧師や教会学校の先生と情報交換し話し合うことが大切です。

ネットの上の友人の危険

今は、友人もネットを介しての関係です。そして、友

人の友人もネットを介して拡散して行きます。異端・カルト集団も、当然、ネットを介しての友人関係から接点を持つようとしています。初対面で、簡単にライン、インスタグラム、フェイスブックの交換は危険です。一度つながると、それだけで簡単に、異端・カルトの人間関係の網に入ってしまうます。入信後も、頻繁に「今、どこ、何をしている」と監視の網に入り、離脱、脱会の兆候も早めに察知されてしまいます。

異端・カルト集団は、便利なネット環境を徹底的に活用しています。「ネットを介してだからまだ大丈夫」ではなく、「ネットを介してだから危険」なのです。

被害の予防（被害者を出さないため）

①教理的体系的な聖書教育

「キリスト教福音宣教会」（摂理）と知らないで、大学の友人から、異端の聖書の学び会に誘われた人の例です。クリスチャンホーム育ちでも、途中で気がついて止める人と、そのまま継続し入信してしまう人がいます。キリスト教の環境に育ち受洗した人でも、止める、止めないの違いは、「教理的体系的な聖書教育」の有無です。

止めた人は、「再臨のキリストは、別にいる」のは、おかしいと思ったそうです。しかし、止めない人は、『三十講論』(異端の教理)の解釈によってキリストとは別に韓国人の再臨主がいることを納得したのです。異端は、聖書の全てを「比喩と象徴」で解釈します。だから、どんな箇所も自分たちの都合よく解釈しすることができま
す。しかし、しっかりと聖書を教理的、体系的に学んでいた人は、どんなことを言われようと、何かおかしいと
気づきます。

「創造論」、「救済論」、「再臨、終末論」は、確認しておく必要があります。「世界平和統一家庭連合」、「キリスト福音宣教会」などの韓国系異端の教理は以下です。人類の墮落は、天使との姦淫が原因、キリストの十字架は失敗で十字架だけでは救いは未完成、だから、終末時代の現代に再臨のメシアが登場。

異端ほど、終末・再臨を曲解し、不安を煽り、教え込みます。また、「You Tube」などでは、極端で不健全な再臨の説教もあります。「新しい時代の啓示」「新しい時代の預言者、使徒」という単語が出てくれば、要注意です。

韓国キリスト教会の異端対策の専門家は、韓国に多くの異端がはびこり、既成教会が甚大な被害を受けているのは、教理的体系的な聖書教育を怠ったからと自戒していました。日本のキリスト教会も同じです。

聖句参照 マタイ24・4、Ⅱペテロ2・1、3・16、黙示録22・18〜19

②異端・カルト情報の提供

「マインド・コントロール」の被害者は、「無知」(知らされていない状態)「脆弱」(弱い状態、弱い立場)にある人です。だから、簡単に心理操作されてしまうのです。

異端・カルトに接した時、「あれ?」と感じることは、「事前に知らされている」からです。何も感じないのは、「知らされていない」からです。そこが、決定的な違いです。

「脆弱」とは、健康や精神状態が弱い時、一人暮らし、失業、失恋で孤独な時です。また教会に行かないことも信仰的には弱い状態です。

異端・カルト信者と知らないで信頼して、個人情報やプライバシー情報を教えてしまい丸裸にされた状態も、

弱い立場です。

異端・カルトに入信し途中で止めた人は、「事前に知らされていたら、絶対に入らなかつたのに」と後悔しています。だから、キリスト教会は、異端・カルトの情報を「知らせる責任」があるのです。

被害の対策（被害者と関係者への対応）

①相談すること

異端・カルト集団は、親、友人に「相談させない」とを最初から徹底させます。だから、周囲が気づいた時には、すでに深みに入ってしまったています。普段から若者と信頼関係を築き、異端・カルト集団があることを伝え、何かあったら、小さなことでも、相談する関係にあることが大切です。

②マインド・コントロールの理解

マインド・コントロールの手法の一つは「情報統制」です。教祖や自分たちの集団だけが正しく、外部の情報は間違いで、悪意のある誹謗中傷^{ひぼう}という構図です。この段階になれば、友人や親による「常識的な説得」は聞く耳を持ちません。専門家の助言、援助が必要となります。

③家族、友人の協力

特に未成年の場合は、家族の協力が不可欠です。まず、その家族にお子さんが異端・カルトに入ってしまった実態を正確に伝えることです。しかし、家族は混乱し無理解のままで説得しようとしています。それは、逆効果で、異端・カルトにますます追い込んでしまいます。とにかく、家族は、あせらないで、冷静に対応することが先決です。また、異端・カルトから家族のもとに帰るためにも、信頼関係を回復することが必要です。

④教会の理解と協力

異端・カルト集団から離れ、立ち帰るところは、救い主イエス・キリストです。異端・カルト集団で、不健全な人間関係や社会生活を強いられていました。だから、時間をかけて、その人に合わせて、健全な信仰生活と社会生活を回復します。そのためには、教会の理解と協力は不可欠です。

困ったことがあれば、教団異端・カルト研究室にお問い合わせください。045・731・5645（横浜栄光教会）

聖書 ルカ23・32～38 テーマ 十字架上での祈り

序論

(福井文彦)

この箇所は、十字架につけられたイエスを描いている最初の部分で、その最初の言葉は祈りでした(34節)。そのイエスの祈りを通して、自らの罪の悲惨に気づき、この十字架のイエスを救い主と受け入れることをルカは求めているのです。

一、いのちを捨てられたキリスト

不当な裁判の結果、イエスの死刑が確定しました。イエスは、刑を受けるために、二人の犯罪人と共に引かれて、着かれたのは「されこうべと呼ばれている所」でした。その場所で、イエスは十字架刑によっていのちを捨てられたのです。

イエスが十字架につけられたということは、重罪人として処刑されたということです。ピラトはイエスを取り調べたのですが、罪は認められませんでした。そこで、ピラトは「彼には死に当る罪は全くみとめられなかった」(23・4、14、22)と三度もユダヤ人に訴えたのですが、

彼らは断固として受け入れませんでした。

ピラトは、ユダヤ人たちの「十字架につけよ、彼を十字架につけよ」(23・21)との脅迫に屈し、死刑を許可したのである。というのは、死刑にはローマの許可が必要だったため、ユダヤ人は死刑を執行することができなかったからです。イエスの上に人々の罪が置かれ、神により罪のないお方が重罪人と定められ、イエスは死んでくださったのです(Ⅱコリント5・21)。これが、イエスが十字架上でいのちを捨ててくださった意味です。

二、十字架は救いのため

イエスは「わたしはよい羊飼である。よい羊飼は、羊のためにいのちを捨てる」(ヨハネ10・11)と言われました。それに続いて、「だれかが、わたしからそれを取り去るのではない。わたしが、自分からそれを捨てるのである。わたしには、それを捨てる力があり、またそれを受ける力もある」ともおっしゃいました(ヨハネ10・18)。イエスが十字架上でいのちを捨てられたのは、自発的にご自分でいのちを捨てられたということです。

役人たちもあざ笑って、「彼は他人を救った。…自分自身を救うがよい」と嘲りました。しかし、十字架は

人々の救いのためであるということをご承知で、イエスは自分を救われなかったのです。

さらに、イエスの十字架は、すべての人の救いのためであるということです。それを示すのが〈父よ、彼らをおゆるしてください。彼らは何をしているのか、わからずにいる〉という、十字架上の最初の言葉です。〈彼ら〉とは直接には大祭司やパリサイ人であり、ローマの兵隊です。しかし、パウロは「すべての人は罪を犯したため、神の栄光を受けられなくなっており」（ローマ3・23）と言っています。ですから、イエスの十字架は、すべての人の救いのためなのです。

三、十字架による罪の救い

十字架は、ローマの処刑方法の中でも特に大きな苦しみを与える極刑でした。釘付けられた者は致命傷を与えられず、激痛と疲労に何時間も苦しみ、多くの者は狂い死にしたと言われています。

しかし、ルカは、イエスの肉体的苦痛にひとことも触れていません。むしろ、イエスがエルサレムの女たちに、「わたしのために泣くな。むしろ、あなたがた自身のため…泣くがよい」（ルカ23・28）と言われたと記してい

ます。ルカは私たちがイエスの肉體上の苦痛に目を奪われ、同情の涙を流すことを求めてはいません。むしろ、私たちが、自らの罪の悲惨とその恐ろしい結末に気づき、この十字架のイエスを救い主として受け入れることを求めているのです。

32〜49節には多数の人々が登場し、それぞれが主の十字架に対する自分の態度を明らかにしています。ルカはこれらの人々の態度を、無知な態度として捉えています。彼らは、イエスが自分を救わず他人を救うのみであることを嘲っているからです。イエスが救うのは、単なる「他人」ではなく、彼ら自身であることに気がつかないのです。イエスは彼らの罪の救いのため、十字架にかかられたのです。このような大きな犠牲と深い愛をもって、救いのために祈られたのです。

結論

毎年のように教会学校や教会の礼拝において語られる個所です。しかし、大切なことは、罪を悔い改め、イエスを私の救い主と信じ、罪の救いの御霊の証と新生の経験をいただき、新創造されることです。

研究資料

(宮澤清志)

本日より、新しい年度がはじまる。主がこの年度、私たちに何をして下さるか、期待しつつ幼子と共に礼拝をささげたい。

テキスト

32 犯罪人 マタイやマルコでは「強盗」と記されている。彼らは習慣のないいわゆる「強盗」の類ではなく、熱心党の者たちであったのではないかという見方もある。それと共に、この犯罪人はユダヤ人であったであろう。39節の言葉よりそのように推測できる。

33 されこうべ ヘブル語やアラム語では「ゴルゴダ」と訳されている。マタイ、マルコ、ヨハネは、この「ゴルゴダ」を採用している。一方、ルカは異邦人に向けてこの福音書を書いていることから、アラム語を避けて「されこうべ」と書いたのであろう。「ゴルゴダ」はラテン語では「カルバリ」である。十字架刑場の名がなぜ「されこうべ」と呼ばれていたのか、その理由は諸説あるが定かではない。ただ、この場所がエルサレム城壁の外側に

あったということだけは確かである(ヘブル13・12)。十字架 具体的に十字架刑がどのように執行されたかについては、マルコ15・14以下を参照。当時の十字架刑はいくつかの方法があった。大別すると、すでに立てられている十字架に、囚人がつるし上げられて固定されるか、それとも横たえられている十字架に釘で打ち付けられ、そしてその十字架が囚人ごとまっすぐに立てられるかである。イエスの場合は、ご自分の十字架をゴルゴダまで運ばされている(26)ので、後者であろう。死刑囚は当然のことながら裸で十字架につけられる。身にまとうものは一切ない。このままの状態で太陽と風にさらされる。しかも、当時の文献では、息絶えるまでには丸一昼夜かかることもしばしばあったようである。

34 父よ、彼らをおゆるしください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです いわゆる「十字架上の七言」のうちの一番目の言葉。ルカのみが記しているイエスの十字架上の言葉である。百卒長は「ほんとうに、この人は正しい人であった」(23・47)とイエスの十字架を表現したが、このイエスの祈りにその意味を見る。この恐るべき状況の中で、イエスは迫害者のために祈った

(6・27～28、11・4参照)。もちろんこの迫害者の中には、イエスを十字架にかけて罵声^{ばせい}を浴びせるローマの兵卒(36)や、イエスをあざ笑う民衆(35)がいた。しかしイエスは、これらの人々だけを指して「彼ら」と言ったのではない。彼らの背後には人間の罪がある。その人間の罪の神に対するとりなしとして、イエスは十字架にかかれたのである。また「彼らは何をしているのか、わからずにいるのです」という祈りは、新約聖書、特にルカにおいて一貫して流れている神学である(使徒3・17、13・27)。「彼ら」を責めるのではなく、むしろあわれみと父へのとりなしに満ちた祈りである。なお、この「わからずにいる」(無知)という言葉は、知的に欠陥があるということではなく、罪ある状態をあらわす言葉として用いられている。人々はイエスの着物をくじ引きで分け合った。死刑囚の衣服を分配するという行為は、当時の貧しい時代の慣習の反映であろうと思われるが、同時に詩篇22・18の成就でもあろう。

35 神のキリスト、選ばれた者 神によりメシヤとして「選ばれた者」ならば、まず自分自身を救うことができるはずである、という考え方に立つての役人たちのあざけ

りの言葉。一方で、民衆は **立って見ていた** とある。この箇所は、他の福音書の並行記事を一緒に読みながら、民衆の思いや他の登場人物の思いを読み取っていただきたい。

38 「これはユダヤ人の王」と書いた札 この札は捨て札と呼ばれ、死刑囚が刑場に送られる時、その首にかけられるか、あるいは他の人によって高く掲げられた。そして死刑囚が十字架につけられる時、それも一緒に十字架につけられた。刑が開始されてから通行人が読めるようにと書かれたものである。この札の言葉「これはユダヤ人の王」とは、総督ピラトがユダヤ教当局に対して腹いせに書かせたもので(ヨハネ19・19～22)、ユダヤ人への嘲笑^{ちやうしやう}の意味を持っていた。しかしこの場面では、イエス自身に対しての嘲笑の意味も持っている。

参考図書 A. T. Robertson, Word Pictures in the New Testament Volume II. The Gospel According to Luke (Broadman), 他

聖書

ルカ23・32～38

タイトル
暗唱聖句

父よ、彼らをおゆるしくください
 父よ、彼らをおゆるしくください。彼らは
 何をしているのか、わからずにいるので
 す。

ルカ23・34

目標

キリストの十字架は自分のためと知り、
 罪の赦しを受け取る。

導入

(後藤 真)

教会にはたいがい十字架があります。どうして、十字架があるのでしょうか。イエス様が十字架にかかられたからです。今日は、十字架にかかられたイエス様のことを受け止めたいと思います。

十字架の刑罰

みなさんは、十字架は何をするためのものか知っていますか。十字架は、罪をおかした人を死刑にするための道具でした。そのころイエス様たちが活動したイスラエルはローマという大きな強い国に治められていました。ローマの法律に背いた人が捕まえられると、裁判にかけられ、それぞれの罪に応じた罰を受けなければなりません。

んでした。

その中でもいちばん重い罰が十字架刑でした。とても悪いことをした人や、ローマに反抗した人が十字架刑を受けました。十字架刑は、死ぬまでにとっても苦しい思いをする、いちばん残酷な罰でした。

では、イエス様はそんな罰を受けなければならないほど悪いことをしたのでしょうか。いいえ、イエス様は一度も罪を犯さなかったのです。何も悪いことをしていない、罪のないイエス様が、他の二人の犯罪人といっしょに十字架につけられたのです。

父よ彼らをおゆるしくください

イエス様が真ん中の十字架、他の二人がイエス様の右と左の十字架にかけられました。そのときイエス様は言いました。

「父よ、彼らをおゆるしくください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです」。

十字架にかけられ、痛くて苦しくて恥ずかしくてつらいのに、イエス様はまず父である神様にお祈りしたのです。しかも、自分を助けてくださいというお祈りではなく「彼らをおゆるしてください」というお祈りでした。

イエス様が十字架で苦しんでいるのに、イエス様の着物をくじ引きで分け合っていた人たちがいました。イエス様に「神のキリストなら自分を救え」と笑った役人たちや「あなたがユダヤ人の王なら自分を救え」とばかにした兵隊たちもいました。

それだけではありません。イエス様に罪がないことを知りながら、イエス様を十字架につけることをゆるしたピラトや、イエス様を十字架につけるためにありもしない罪をきせたユダヤ人たち。そして、イエス様が捕まると逃げ出した弟子たちや、イエス様のことを三度も知らないと言ったペテロたち。みんな神様の思いが何かを考えず、イエス様のことも考えず、自分のことだけしか考えていませんでした。

イエス様はこのような、自分のことしか考えない人たち、イエス様を苦しめ、ばかにし、裏切り、十字架につけた人たちのことを思っ「父よ彼らをおゆるしく下さい。彼らは何をしているのかわからないのです」と祈ったのです。そして、イエス様はすべての人の身代わりとなるために、自分が十字架から逃げ出すことをしないで、最後まで十字架の苦しみを受けるのです。

わたしたちをゆるすために

わたしたちはどうでしょうか。わたしたちも自分のことばかり考えてしまうことはないでしょうか。神様の思いや、イエス様の喜ばれることよりも、自分の得になることや自分が楽しいと思うことを思っていないませんか。

そのように心の真ん中に自分が座っている人、自分自身を自分の王様にして生きingことを「罪」と言います。この罪があるままでは、人生を豊かに正しく生きることができません。そして、やがて神様の前に出るとき、厳しいさばきを受けなければなりません。

イエス様はそんなわたしたちを赦すために、わたしたちが受ける罰の身代わりとして十字架にかかってくださいました。わたしたちがまだイエス様のことを知らないときから、罪が何か知らないで生きていたときから、わたしたちをゆるすためにそうしてくださいだったのです。

イエス様の十字架がわたしたちの罪のためであることを受け止めて、イエス様に喜ばれる生活をしてゆきましよう。

♪両手いっぱいいの愛♪

(ホ146、イン41、新聖歌483、PW13)

聖書 ルカ23・39〜43 テーマ 十字架による救い

序論

(福井文彦)

イエスと共に二人の犯罪人も、一人は右に一人は左に十字架につけられました。この二人の犯罪人の一人が死の直前に、イエスと出会います。彼はイエスが罪のない救い主であることを認めたのです。そこで、彼は世の終わり、イエスの再臨の時の恵みを願いました。ところが、世の終わりを待つまでもなく、イエスは「あなたはきょう、わたしと一緒にパラダイスにいるであろう」と言われ、その時、その場で救われたのです。

一、二人の犯罪人

イエスと共に十字架につけられた二人の犯罪人は、初めは他の人と一緒になってイエスをののしっていました(マタイ27・44)。ところが、イエスは十字架に釘づけられた時、敵を愛し、赦してこう祈られたのです。「父よ、彼らをおゆるしください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです」(23・34)と。時間の経過と共に十

字架上で激痛は増し加わっていきます。イエスはそのような中で、ののしる者たちに対してもののしり返さず、苦しめられても、おびやかすことをされず、最後まで人を赦し、愛し続けられたのです(1ペテロ2・23)。

しかし、一人の犯罪人は、「あなたはキリストではないか。それなら、自分を救い、またわれわれも救ってみよ」とイエスに悪口を言い続けました。ところが、どの時点かはわかりませんが、もう一人の犯罪人の心が変わりはじめたのです。自分には罪があることがわかり、さらに、中央の十字架にかかっているナザレのイエスというお方は、普通の人とは違うということを感じはじめたのです。

二、十字架による救い

イエスに悪口を言い続ける犯罪人に対して、もう一人の犯罪人は彼をたしなめて言いました。「おまえは同じ刑を受けていながら、神を恐れないのか」と。罪がわからなければ神はわかりません。神がわからなければ罪はわかりません。この犯罪人は自分の罪がわかり、神に対して畏敬の念が生まれました。しかし、悪口を言い続けた犯罪人のように、十字架刑を受けるほどの犯罪でも、罪の自覚をもたないと、「神を恐れない」のです。

さらに、たしなめた犯罪人は、〈お互いは自分のやった事のむくいを受けているのだから、こうなったのは当然だ。しかし、このかたは何も悪いことをしたのではない〉と、信仰を告白しました。彼は、自分の罪を認め（認罪）、罪を告白し（悔い改め）、イエスに罪がないことを認め（イエスを神と認め）、イエスに対する信仰を表したのです。救いは、罪が大きい小さいという問題ではありません。私たちが神を敬う気持ちを持った時に、自分のうちに赦されなければならない罪があることに気がつきはじめます。そのありのままの自分を神の前に言い表わす時、イエスは犯罪人をお救いになったように、私たちを救ってくださいなのです。

三、一緒にパラダイスにいる

この犯罪人は、もう一人の犯罪人のようにイエスが十字架から降りて助けることを願わないで、こう嘆願したのです。〈イエスよ、あなたが御国の権威をもっておいでになる時には、わたしを思い出してください〉と。彼は一般のユダヤ人、もう一人の犯罪人や弟子たちのように地上王国を思わないで、イエスの再臨の時に覚えてくださることを願いました。

するとイエスは、よく言っておくが、あなたはきょう、わたしと一緒にパラダイスにいるであろうと告げられました。そのイエスは午後三時に息絶えたと言われています（44～46）。しかし、この犯罪人がイエスより先に死んだのか、後で死んだのかわかりません。十字架にかけられた場合、二日も三日もかかって死ぬということもありました。

しかし、イエスはその犯罪人に〈パラダイス〉を〈きょう、わたしと一緒に〉あるものと宣言されたのです。ですから、〈きょう〉というのは、〈きょう、パラダイスにいる〉とイエスが言われた、その時なのです。救われた者は、キリスト・イエスにあつて生かされ、共によみがえらされ、共に天上の座に着かせていただくのです（エペソ2・4～6）。これがイエス・キリストの福音です。

結論

イエスは、だれでも、再臨を待つまでもなく、神に立ち返るものを、息を引き取る一瞬だけでなく、いつでもどこでも救いうるお方です。

研究資料

(宮澤清志)

この個所は、ルカだけが描いている個所である。ルカによる福音書の中心聖句のひとつは「人の子がきたのは、失われたものを尋ね出して救うためである」(19・10)であろう。すなわち弱い者、数に足りないと考えられている者たちへの福音ということである。ルカは、十字架を語るに当たって再度この事実を語ったかったのである。受難週にあたり、もう一度このルカのメッセージに耳を傾けたい。

テキスト

39 32〜33節より、イエスの十字架は二人の犯罪人の間に立てられたことが分かる。伝説によれば、本節のイエスをのしる言葉をかけた犯罪人は、その左側にいる犯罪人だったと言われている。「あなたはキリストではないか。それなら、自分を救い、またわれわれも救ってみよ」とののしった言葉から、この男がユダヤ人であって、革新的な熱心党のメンバーであったであろうと推測される。この男のこの言葉を読み解くと、彼は死に際してな

お己の運命に抵抗し、己の犯した罪を他になすりつけ、特に十字架のキリストにその罪を着せようとしているのである。十字架上で死ぬのみで、両脇の犯罪人を救うことをしないのみか、イスラエルのために戦うことをしなかったメシヤは、もはやメシヤではないのである。それゆえ彼は、役人や総督の側に立ってイエスを裁くのである。一方イエスは彼の熱心黨員としての裁きをも背負い、黙って十字架にかかられた(イザヤ53・7)。

40〜41 この部分についてはルカのみが語っている。他の福音書では、「一緒に十字架につけられた者たち」(マルタイ27・44)、「一緒に十字架につけられた者たち」(マルコ15・32)となっている。いずれの記述も、この問題をふさわしく扱っているであろう。二人とも、初めはイエスをのしっていたのかも知れない。しかし、十字架上でのイエスの振る舞いを見て、片方の強盗が悔い改めへと至ったのかも知れない。いずれにしても、この強盗は自らをイエスの側に置いた。自分の死を目の前にして、自らが罪人であることと、自らにくだった嚴罰を受け入れたのであろう。

42 御国の権威をもっておいでになる時には この個所

にはいくつかの訳語が見られる。「御国の位にお着きになるとときには」(新改訳)、「御国においてになるとときには」(新共同訳)、「王権をもって来られるときには」(フランシスコ会訳)、「あなたの王国」(岩隈 など。これらの相違は写本(筆者たちが写したテキストを幾度となく書き写したもの)の相違による。ある写本の直訳は「あなたの御国に行くとき」となり、また別の写本では「あなたの御国をもつて行かれる(来られる)とき」となる。新改訳は前者、口語訳は後者の写本を採用する。訳の良さしではなく、各教会で使用している訳に注意を払いつつ、説教者の黙想のヒントとしていただきたい。

43 きょう ルカにおいて、この言葉の一つの意味は、もちろん「昨日と明日の間の二十四時間」という意味を持つ(12・28、13・33等)。しかし、ルカにとつてはそれ以上に重要な「きょう」とは、時間の流れの中から抜け出した、特別な意味を持つ。それは、イエスのメシヤ的救いの出来事の起こる日のことである(2・11、4・21、5・26、19・5、9等)。ありふれた「ある日」を「きょう」に変貌^{へんまう}させる力は、神の約束の成就にある(ヘブル4・7)。同時にその時間は、「歴史によって期待され準

備されたものを満たしつつやってくる」のであり、ルカからは離れるが、そのことをもつともよく表しているみ言葉は「時は満ちた」(マルコ1・15)の「時」である。さて、このことに関連し、ギリシャ語には「カイロス」と「クロノス」という、2つの時間感覚があると言われる。「クロノス」とは、英語の「クロック」が示すように、時計で測ることのできる時間である。「カイロス」の方は、「永遠の今」という意味合いを持つ言葉であり、イエスがこの強盗に対して語られた「きょう」とは、後者「カイロス」の意味においてである。

パラダイス ペルシャ語から来た外来語で、元来は「囲い」を意味し、果樹その他を植え込んだ「園」を意味した。七十人訳聖書(ギリシャ語訳旧約聖書)では、特に「神の園」をさす言葉として用いられており(創世記2・8以下、13・10、エゼキエル31・8)、そこから派生して、元来の、しかし今は隠されており、未来に再び啓示される楽園、すなわち終末の時代に回復されるエデンの園を意味する名称となった。

参考図書 4月7日分と同じ。

聖書

ルカ23・39〜43

タイトル

十字架の救い

暗唱聖句

あなたはきょう、わたしと一緒にパラダ

目 標

イスにいてであらう。

ルカ23・43

悔い改めと信仰を持って、十字架による救いを受け取る。

導入

(後藤 真)

今週は受難週です。受難週は、イエス様が苦しみを受けて十字架にかかられたことを心にとめて生活します。イエス様の苦しみを思つて、ぜいたくやお祝いを控えたり、断食をしたりする人もあります。十字架のことを知っているだけではなく、生活の中で受け止めるのが受難週です。教会の先生や家族と受難週の生活を考えてみるのもよいかもしれません。

ふたりの犯罪人

イエス様が十字架につけられたとき、いっしょに十字架につけられた人がふたりいました。このふたりは強盗でした。十字架という重い刑を受けたのですから、ただの強盗ではなく、ローマに逆らった犯罪人だったので

しよう。そのころ世界を治めていたローマに逆らうことはとても重い罪だったからです。

そしてこのふたりはイエス様を真ん中に、右と左にそれぞれ十字架にかけられました。何も罪を犯していないイエス様が、罪を犯したふたりといっしょに十字架につけられたのです。

われわれも救ってみよ

犯罪人のひとりにはイエス様に悪口を言いました。

「あなたはキリストではないか。それなら、自分を救い、またわれわれも救ってみよ」

十字架につけられ苦しかったのでしょうか。助けてほしい気持ちがあつたのでしょうか。でもそれなら「助けてください!」とイエス様に素直にお願いすればよかったのです。でもそうしないで、イエス様に「自分を救ってわれわれを救え」と、悪口を言い続けました。

この人には、

「父よ、彼らをおゆるしく下さい。彼らは何をしていいのか、わからずにいるのです」

とお祈りして、十字架にかかっている自分さえも救おうとしておられるイエス様の気持ちがわからなかったので

す。イエス様が十字架から降りて、助かってしまったら、罪がゆるされる道がなくなってしまうということを知らなかったのです。

もうひとりの犯罪人がそれをたしなめて言いました。

「おまえは同じ刑を受けていながら、神を恐れないのか。お互は自分のやった事のむくいを受けているのだから、こうなったのは当然だ。しかし、このかたは何も悪いことをしたのではない」

この人は、自分が十字架につけられているのは、自分がやったことの罰だと素直に認めました。そしてイエス様こそが何も罪を犯していない正しい方であることを信じたのです。

自分を王様に行っていること、心の中心に自分がいることを「罪」と言います。人間の作った法律に違反するかどうかということではありません。また人に迷惑をかけるかどうかというようなことでもありません。イエス様を無視して自分の思い通りに生きること、まわりの人を無視して自分をいちばんすることが罪なのです。

パラダイスに

もうひとりの犯罪人が言います。

「イエスよ、あなたが御国の権威をもっておいでになる時には、わたしを思い出してください」

イエス様は答えます。

「よく言っておくが、あなたはきょう、わたしと一緒にパラダイスにいますであろう」

自分は罪人だ。十字架で死ぬだけでなんの償いもできない。イエス様に「救ってください」なんてお願いできない。「思い出してください」というお願いには、そういうへりくだった気持ちがあるように思います。イエス様はそのことを受け止めてくださいました。

「パラダイス」は、イエス様がいっしょにいてくださるところです。イエス様がいっしょにいてくださるということは、もう滅びないということです。

イエス様といっしょに永遠に生きていきたいですね。イエス様はそのために、十字架にかかり「わたしたちの罪」をゆるしてください、と神様に祈ってくださいています。このイエス様の気持ちにこたえましょう。罪があることを認めて、イエス様を信じ、十字架の救いをいただきます！

♪両手いっぱい愛（ホ146、新聖歌483、PW13他）

聖書 ルカ24・1～12 テーマ よみがえられたキリスト

序論

(小泉 創)

イエスに従ってきた女性たちは、愛するイエスの死をなすすべもなく見守りました。それはどれほどの悲しみ、痛みだったことでしょう。彼女たちは三日後、まだ夜も明けないうちに墓へと向かいました。葬られたイエスのために、自分たちにできる精一杯のことをさせていたかどうかと願ったからです。しかしそこでは、思いもかけない出来事が彼女たちを待っていたのです。

一、途方に暮れる

墓についた女たちは、主イエスの墓をふさいでいた石が転がされ、墓の中には葬られたはずの主のからだが見当たらないのです。さらに悲しみが上乘せされる事態に、彼女たちは途方に暮れるしかありませんでした。思いがけない現実打ちのめされ、途方に暮れるのは、私たちも一緒です。そのように、私たちの経験や、準備してきたことが何も役に立たないことがあります。

女たちが、空の墓の意味していたことを想像しえなかったことは、無理もないことです。死は断絶です。生きている者と死んだ者との間には深い淵があります。誰がその深い淵を乗り越えようと考えるでしょうか。

しかし、神にはできないことはありません。万策尽きた絶望の中からでも、神はみわざを始めることのできるお方です。今、私たちの目の前にある、空の墓のような現実にも、神は力をあらわすことができると信じますか。

二、驚き恐れる

突然、輝いた衣を着たふたりの者が、女たちの目の前にあらわれました。常識を超えた何かが起きていることは明らかでした。女たちは驚き恐れ、地に伏せる以外にありませんでした。

〈なぜ生きた方を死人の中にたずねているのか。そのかたは、ここにはおられない。よみがえられたのだ〉。十字架で死なれた主イエスのことを、このふたりの者は生きた方と呼びました。そして、よみがえられたのだ、と宣言しました。

死は終わりではないということです。主イエスは生と死

の深い淵を乗り越えて帰ってこられたのです。誰も死に打ち勝つことはできなかったのに、勝利なさったお方がここにおられるのです。死の中に閉じ込められるすべての人に、解放を告げる勝利の宣言です。

クリスマスに神の子が人として来られたことも驚きです。しかし十字架で死なれ、墓に葬られた方がよみがえられたというイースターの出来事はさらに大きな驚きです。このことを事実と信じたときに、この世界はまるで違う光景に様変わりします。

三、証人となる

輝いた衣を着たふたりの者は、イエスの語っていた言葉を思い出しなさいと告げました。そのことを聞くまで、女たちもイエスが約束しておられたことを忘れていました。

「しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってつかわされる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、またわたしが話しておいたことを、ことごとく思い起させるであろう」(ヨハネ14・26)。

私たちを本当に力づけるのは、聖書の中に記されている

る神のみ言葉です。そのみ言葉に聖霊が働かれたときに、私たちは変わることのない神の声を聞き、生きておられる神にふれていただけるのです。

女たちはイエスがよみがえりを約束しておられたことを思い出し、信じました。だから、急いで弟子たちのところに帰り、自分たちが知ったことを伝えたのです。

そこではすぐに理解してもらえただしょうか。いいえ、やはり使徒たちにも、愚かにしか聞こえませんでした。けれどもやがて彼らも信じるべき時が用意されていたのです。ですから証人とされた者は、真実なあかしを続けることが必要なのです。

結論

イエスはよみがえられた！それは女たちが今まで見聞きしてきたどのような奇跡よりも、大きな驚きと喜びとなりました。よみがえりの命は、悲しみ、途方に暮れ、恐れている者たちを、喜び、希望であふれさせます。私たちも、主イエスが与えてくださった喜び、希望のあかしをしていきましょう。

研究資料

(金井由嗣)

文脈

ルカによる福音書には、主の十字架と復活について繰り返し教えられながらその本質を理解できない弟子たちの姿が描かれてきた。復活の日の記事においてもそれは変わらない。聖霊によって新しく生まれなければ十字架と復活の奥義は理解できないからである。しかし主イエスは「愚かでこころのにぶい」(25)弟子たちを見捨てず、繰り返し彼らに御自身を現し、旧約聖書からメシヤの苦難と復活について教えられた。ペンテコステの日に聖霊が降ることによって弟子たちは主の教えを真に理解し、確信を持つて福音を宣べ伝え始めたのである。

テキスト

1 週の初めの日、夜明け前に 主イエスが十字架で息を引き取った金曜日の日没から土曜日の日没までは安息日であったため死体に触れることはできなかった。安息日が終わった土曜日の日没後に女性が外を出歩くことは危険だった。それゆえ、彼女たちは可能な限り早く主の墓に向かったのである。**用意しておいた香料** 時間の制

約で略式の埋葬しかできなかったため、改めて正式な葬りを行おうとしたのである。

2 石が墓からころがしてあるので マタイの並行箇所には御使が石を動かして地震が起こったとの記述があるが、マルコとルカは石が動いていた事実のみを記している。女性たち自身の目撃証言であらう。

3 主イエスのからだが見当らなかった 女性たちは主イエスの遺体が当然墓の中にあるものと思っていた。主を心から愛していた彼女たちにとっても復活は思いもよらない出来事だったことがわかる。

4 途方にくれていると 前置詞[ギ]エンと不定法が用いられ、事柄の同時性が示されている。「途方に暮れていたまさにその時に」とでも訳せばよい。**輝いた衣を着たふたりの者** マタイでは「主の使い」、マルコでは「若者」で共に単数形。ルカは主イエスの昇天の記事(使徒1・10)でも現れた御使が「ふたり」であったことを記している。明らかにルカは重要な出来事の証人として「二人」が現れたことを重視している。ヨハネ20・12にも「ふたりの御使」が登場することから、この時の御使が二人いた事には強固な伝承があったとみなしてよい(マーシヤ

ル)。現れた〔ギ〕エフィステミ、直訳は「すぐそばに立っていた」。それまでいなかったものが突然そばに立っていることで、超自然的な出現が示されている。使徒12・7も同様。

5 驚き恐れて、顔を地に伏せ この記述からも御使の出現が超自然的な出来事であったことがわかる。なぜ生きた方を死人の中にたずねているのか この問いかけは他の福音書には見られないが、ルカの文脈には適合している。熱心に主に従いながら、復活を理解できず見当違いのところを探している弟子たちの姿が示されている。

6 そのかたは、ここにはおられない。よみがえられたのだ マタイとマルコにも共通する復活の宣言である。知的理解によって復活を受け入れることはできない。神の宣言（み言葉）をそのまま受け取る信仰が求められている。まだガリラヤにおられたとき…思い出しなさい十字架と復活の予告は、主イエスによって度々語られていた。弟子たちに必要なのはそのみ言葉を思い出し、信じることだった。「ガリラヤ」はマタイとマルコでは復活の主と出会うために帰っていく場所だが、ルカではそこで語られたみ言葉に帰るべきことが強調されている。

8-9 女たちはその言葉を思い出し、墓から帰って…報告した 語られたみ言葉に立つて復活を最初に信じたのは、この女性たちだった。

10 この女たち 福音書によって多少の異同はあるが、マグダラのマリヤについては全て一致している。女性たちの復活証言においては彼女が中心的役割を担っていた。「ヤコブの母マリヤ」は主イエスの母であろう。

11 使徒たちには、それが愚かな話のように 女性たちの証言にもかかわらず、復活を信じようとしない男性の弟子たちの姿が描かれる。ルカが繰り返し記録する「愚かで心のにぶい」弟子たちの姿である。

12 この節は本文の取り扱いに注意を要する。一部の古代写本や教父の引用にはこの節を欠いたテキストが存在するため、ヨハネ福音書の記事に由来する後日の挿入とみなす学者もいる。しかしこの記事はヨハネよりも古い伝承に由来することと24節との整合性から、ルカ本来の記事であったとみなしてよい（マーシャル）。

参考図書 ボウカム『イエス入門』、クラドック（現代聖書注解）、モリス（ティンデル）、Green (NICNT)、Marshall (NIGTC)。

聖書

ルカ24・1〜12

タイトル

イエス様はどこに？

あなたがたは、なぜ生きた方を視認の中にたずねているのか。

ルカ24・5

目標

よみがえられたイエス様とともにいられることを喜ぶ

導入

(後藤 真)

みなさんは、お墓に行ったことがありますか。教会のお墓(納骨堂など、教会の墓地の呼び方に合わせて言い換えてください)に行ったことがあるかもしれません。お墓には死んだ人の骨が入れています。お墓に行くとその人のことをなつかしく思い出します。

ところが、聖書には空っぽのお墓が出てきます。なんとそれはイエス様のお墓です。

日曜日の朝早く

イエス様が十字架にかかって死んだのは金曜日でした。土曜日は安息日で、なんの仕事もできない日でした。それでイエス様の体は金曜日のうちに急いで十字架から降ろされ、岩を掘って作ったお墓に入られました。お

墓の入り口には、何人もの力持ちがいないと動かせないほど大きな石で蓋がしてありました。

マグダラのマリヤと何人かの女の人たちは、イエス様のからだを、もっといいねいにきれいにしてお墓に入れ直したいと思い、日曜日の朝早く、香料や香油をもってお墓に急ぎました。ところがなんと、あの大きな石が転がしてあって、お墓の入り口が開いていたのです。おそるおそる中に入ってみると、イエス様のからだはありませんでした。お墓は空っぽだったのです！

ここにはおられない

するとそこに、輝く服を着た二人の人が現れました。マリヤたちはびっくりして顔を上げることもできませんでした。この二人の人は御使い(参考マタイ28・1〜5)でした。そしてこう言いました。

「あなたがたは、なぜ生きた方を死人の中にたずねているのか。そのかたは、ここにはおられない。よみがえられたのだ。まだガラリヤにおられたとき、あなたがたにお話しになったことを思い出しなさい。すなわち、人の子は必ず罪人らの手に渡され、十字架につけられ、そして三日目によみがえる、と仰せられたではないか。」

イエス様は、お墓にはいません。よみがえられたのです。十字架にかけられる前にお話しされていたとおり、金曜日、土曜日、日曜日で、びったり三日目によみがえられたのです。御使いたちはそのことをマリヤたちに伝えたのでした。

マリヤたちはこのことを思い出して、お墓で見たことをイエス様の弟子たちや、まわりの人たちに伝えました。でも弟子たちは、「そんなばかな」「イエス様は十字架で死んだじゃないか。死んだ人間がよみがえるなんてありえない」と、信じようとしませんでした。

「弟子たちは信仰がないなあ」なんて、責めることはできません。信じられないのが当たり前です。死んだ人がよみがえるなんて、ぜったいにないことだからです。それは人間には思いもつかないこと、人間の力ではできないことでした。神様がイエス様を死んでいたのによみがえらせたのです。

ともにおられるイエス様

今でもイスラエルに行くと、「ここがイエス様のお墓だった」と言われている場所があります。そこには「ここにはおられない。よみがえられたのだ」と書かれてい

ます。イスラエルに旅行して、イエス様のお墓を訪ねても、イエス様をなつかしく思い出すことはできません。なぜならイエス様は今も生きておられるからです。生きている方をお墓で思い出すということはできないのです。

では、イエス様は今どこにいますのでしょうか。わたしたちといっしょにいてくださいます。そして聖書のことばを通して励ましてくださったり、お祈りを聞いていてくださったりします。

イエス様がよみがえられたことを信じなかった、弟子たちは、十字架でイエス様が死んで、がっかりしていました。でも、よみがえられたイエス様に出会ったとき、喜びでいっぱいになりました。そしてイエス様から、イエス様を証しするはたらきを任されます。

イエス様は、弟子たちのようにわたしたちもイエス様を証して生きるように願っています。よみがえられたイエス様といっしょに、いつもイエス様の喜ぶことができるように、お祈りして励みましょう。そんなわたしたちの生活が、ともだちにイエス様を伝えるのです。

♪主は今生きておられる♪(PW49)

聖書 ルカ24・13～32

テーマ エマオへの道

序論

(水川武志)

今日のところは、一般に「エマオの途上」とか、「エマオへの道」と題されています。主題は「心の目を開かれて」です。主イエスの復活という事は主イエスの処女降誕以上に、受け入れ難い出来事です。実は、エマオの途上の二人の弟子たちも、主イエスの復活ということに対して心を開いていたとは思えません。甦^{よみがえ}りのイエスとの親しい交わりや、食事を共にする中で、復活の祝福の中に引き入れられた物語です。復活のイエスのほうから、心の目を開いてくださった恵みの証です。

一、目がさえぎられていた弟子たち

この日(主の甦りの日)、恵みの座から悲しそうな顔をして、遠ざかっていく人たちがいました。彼らは、主が甦られたとのメッセージを聞いていたのです(23)。でも、甦りのメッセージは、彼らに喜びをもたらしませんでした。迫害下に教会を誕生させ、歴史を変えていく、

あの爆発的な力が沸き上がってこないのです。実に不思議なことです。

先年、私も空の墓(聖墳墓教会^{せいふんぼきやうかい})を訪ねてきました。

墓が空である事実、主の復活を記念する数々のレリーフ等を見ましたが、それで、自分を変える程の力を体験できませんでした。復活の信仰とは、人間が様々な知恵を尽くし、墓の空っぽであることや、他の人の体験談を聞いたこととで確かめられることではないのかも知れません。今、生きておられる主イエスにお会いすることによって、初めて道が開かれることでしょう。

福音が伝える主イエスの甦りについては、甦られた主イエスのほうからいつも近づいて、ご自身の復活の事実を証しておられます。目がさえぎられている不信仰を取り除いていただくべきなのです。

二、目を開いてくださる主イエス

悲しみつつ恵みの座から遠ざかる弟子たちを、主イエスは無視されません。(イエスご自身が近づいてきて、彼らと一緒に歩いて行かれた)のです。彼らの心は、十字架につけられたイエスのこと、墓に行った数人の女性

たちが伝えた空の墓のこと、(イエスは生きておられる)との御使いのメッセージに占領されていたのです。けれども主イエスの甦りの命には、満たされていませんでした。

私たちの間にも、同じようなことはないでしょうか。十字架と復活に関する研究が盛んになされながら、命の躍動につながってこないのです。しかし、そんな時にも、私たちに語りかけるお方がおられるのです。

かつて、殺人の上に放火して証拠の隠滅を謀った人を拘留所に訪ねたことがあります。彼は無罪を裁判で主張していたのです。訪問帰りに、新約聖書を差し入れ、読んで祈ることを約束させました。一週間後、再訪問した時、彼の態度は一変していたのです。無罪の訴えではなく、「イエス・キリストが十字架にかけられたことと、復活されたことが聖書に書かれていました。私は神様に罪を告白しました。そして殺めた人^{あや}が天国に入れられますように、毎日祈っています」と言うのです。彼は、控訴を取り下げ、素直に刑に服し、新しい歩みを始めました。神が彼の心を目覚めさせ、罪の悔い改めとキリストを信じる信仰に導かれたのです。

主ご自身が、聖書全体を説き明かし、福音の真理に目覚めさせてくださったのです。エマオの弟子たちは、この恵みを経験したのです。私たちも心を開いて、主のお働きに耳を傾けるのです。

三、目が開けて、イエスがわかった

み言葉が説き明かされた時、心が内に燃え始めました。それは後になって気づくほどの、静かな経験でした。しかし、この穏やかな火は人生を変え、世界を変えるほどに確かなものでした。み言葉がわかり始めたのです。み言葉が示す主の恵みによって彼らの心が開かれ、イエスであることがわかったのです。主イエスのお姿が見えなくなっても揺るがない確信が、彼らの心を占領したのです。

結論

研究の成果としての知識ではなく、私たちに語りかけてくださっているお方のみ言葉を聞き得る心の目を開かせていただきます。生徒に教えることに勝って、復活の主を証しする者として、用いていただきます。

研究資料

(中島啓二)

ルカ福音書も、イエスの復活の場面を直接には描いていない。御使いたちが女性たちに主の復活を宣言し、それを聞いた彼女たちが他の弟子たちに知らせた。ここに登場する二人の弟子も、彼女たちからそのことを聞いていた。にもかかわらず、その心はなお暗かったのである。

テキスト

13 ふたりの弟子 一人の名はクレオパとある。ヨハネは十字架のそばにクロパ（＝クレオパ）の妻マリヤがいたと記す(19・25)。それがもう一人の弟子かもしれない。**エルサレムから七マイル** 約12 km。エマオという村 正確な位置は不明。ヨッパへの途上にアムワスという地名があるが距離が32 kmもある。エルサレムの西のアツマウスは距離が6 kmと、半分しかない。もしかしたらルカは往復の距離を記したのかもしれない。

15 イエスご自身が近づいてきて 失意の中にある彼らに、イエスの側から近づいてくださった。信仰も神からの賜物なのである(エペソ2・8)。

16 彼らの目がさえぎられて… イエスの容貌が以前と

変わっていたのではない。マグダラのマリヤの場合と同様(ヨハネ20・14)、霊的な理由で、彼らはイエスに気づけなかったのである。

21 イスラエルを救うのはこの人であろうと この弟子たちはイエスを単なる力ある預言者としてだけでなく、ある種の救い主と見ていた。しかしそれは、当時の一般的な見解である「神の民、すなわちイスラエル」を敵の手から救い出す救い主であり、その望みはイエスの死によつて、消え去っていた。きょうが三日目なのです。彼らは、イエスが以前、ご自身の死の3日目に何かが起こると語られたのを、おぼろげに覚えていたのである。にもかかわらず、数々の出来事から何も悟らなかつたのは、霊的に鈍感と言わざるを得ない。

22・23 わたしたちの仲間である数人の女が… 10節に記されている女性たち。彼女たちは御使いを通してイエスの復活の予告を思い出し、墓が空であることの意味を悟った。そして喜びをもってそのことを使徒たちに伝えたのであるが、彼らはそれを信じなかつたのである。

24 イエスは見当りませんでした 墓が空である事実を弟子たちは確認していた。だがその事実も、死者の中に

イエスを捜す者には、失望しかもたらさないのである。

25 預言者たちが説いたすべての事 間違ったメシヤ理解が、間違ったイエスの死の解釈につながり、その結果が失望となった。それを正すため、イエスは聖書に基づく正しいメシヤ理解を弟子たちに語ったのである。

26 キリストは必ず、これらの苦難を受けて、その栄光に入る これが預言者の指し示すキリスト像であった。

苦難は、栄光のために必要な筋道であったのである。しかし当時のユダヤ社会にメシヤと受難を結びつける思想があったかどうかは疑問である。むしろ一般的には、受難は国家・民族と結びつけられ、メシヤはその苦難からの解放をもたらす使者として期待されていたのである。

27 モーセやすべての預言者からはじめて 旧約聖書は律法、預言書、諸書の三つに分類される。聖書全体にわたりの「聖書(ギリシア語)」は「諸書」の意もあるが、ここでは旧約聖書全体ととらえるのが妥当。

28 なお先へ進み行かれる様子であった このようにして、相手に、もてなしを申し出る機会を与えることは、礼儀にかなったことであった。

29 しいて引き止めて 旅人へのもてなしは宗教的にも

高位の美德であった。夕暮になっており その日のメイソンの食事をする時間。5千人の給食も「日が傾きかけた」(9・12)頃であった。

30 パンを取り、祝福してさき… 普通はその家の主人がする作業。それをイエスが行ったのである。これは弟子たちに、前述の5千人の給食、さらに最後の晩餐(22章)を思い出させたであろう。

31 彼らの目が開けて その呼び覚まされた記憶が彼らの目を開き、彼らはいよいよイエスを認めるに至ったのである。するとすぐにイエスは見えなくなったが、そのことはもはや彼らに悲しみをもたらさなかった。

32 お互の心が内に燃えたではないか 単なる心の高揚ではなく、それ以上のもの。バークレーは「心が不思議と暖かくなった」と訳す(これはウエスレーのアルダスゲイトの回心を彷彿させる)。後代の信者たちも、この弟子たちのように、よみがえられた主の臨在を認めるところから、内なる心の燃え上がりを経験するのである。

参考図書 注解書 Ellis (NCB), Marshall (NIGTC), Nolland (Word), 榊原康夫(新聖書注解)。その他 The IVP Bible Background Commentary: NT

聖書

ルカ24・13～32

タイトル

復活のイエス様に出会う

彼らの目が開けて、それがイエスである

ことがわかった。

ルカ24・31

目標

霊の目を開いて頂いて、復活のキリストを見る者となる。

導入

(飯田勝彦)

先週は、イースターでした。イエス様は、週の初めの日、今で言えば日曜日に復活されました。教会は約二〇〇〇年間、日曜日に教会に集まり、復活されたイエス様を覚えて礼拝しています。ですから、毎週、イエス様の復活の恵みを頂くことができます。この素晴らしい恵みを皆さんも体験し続けてください。

死より復活されたイエス様

これまで数週間に渡り、イエス様の十字架のお話を聞いてきました。イエス様は、どうして十字架にかかって死ななければならなかったのでしょうか、悪いことをしたからですか？ 一番弟子のペテロはどうして十字架にかかれるイエス様を、お守りすることができな

かったのでしょうか？ みんな覚えていますか。

イエス様は、十字架にかかるような罪は何も犯されませんでした。でも、私たち人間の醜い罪を赦し、罪から救い出すためにイエス様は、十字架にかかれ死なれました。そして、お墓に葬られたのです。そのお墓の入り口は、大きく重い石でふさがれました。

死とは、悲しく恐ろしいものです。でも、イエス様は死んで終わりではありませんでした。死から復活されたのです。これは、イエス様が前に約束されていることでした。イエス様は、復活を通して、私たちの最大の敵である死を撃ち破り、勝利してくださいました。この復活の恵みを深く心にとめて歩みましょう。

イエス様が分らない弟子たち

イエス様が復活されたその日、二人の弟子たちがエマオの村に向かって歩いていました。二人の話題の中心は、イエス様のことでした。

「なあ、イエス様が十字架で殺されたなんて、信じられないよ。」

「悲しいけど、本当なんだ。でも、そのイエス様が復活されたらしいよ。婦人たちが墓に行ったら、イエス様が

おられなくて、天使たちが『イエス様は生きておられる』と告げたらしい」。

するとそこに、何と復活されたイエス様が来られ、弟子たちが話し合っている内容を尋ねられました。弟子たちは立ち止まって、エルサレムで起こったことを話し始めました。しかし、彼らはそれが復活されたイエス様だと気付きません。それは、彼らの目がさえぎられていたからでした。

もし、私たちが復活のイエス様を信じる事ができないとするなら、弟子たちと同じように目がさえぎられています。それは身体の手目ではなく、霊の手目です。

イエス様が分かった弟子たち

復活されたイエス様は弟子たちに、聖書に約束されているご自分のことについて話されました。

弟子たちは、イエス様のお話しが非常に興味深かったのでしょう。もっと聞きたいと思って「一緒に泊まってください」と願いました。イエス様は、それを快く受けられました。

食事の時間になったとき席に座り、イエス様はパンを取り、賛美の祈りを唱えて、パンを裂き弟子たちに渡さ

れました。その時です！ 弟子たちの霊の目が開かれたのです。目の前におられる方が、十字架に架かり復活されたイエス様だと分かったのです。その瞬間、イエス様の姿は見えなくなりました。

弟子たちは「あの方と話しをしている時に、心が燃えていたのは、あの方が復活のイエス様だったからだ」と語り合いました。復活のイエス様に出会った彼らは、このことを他の弟子たちにも伝えました。イエス様に出会った弟子たちは、どんなに嬉しかったでしょうか。

まとめ

復活のイエス様との出会いは、私たちの歩みに大きな喜びを与えてくれます。でも、霊の目が開かれないう復活のイエス様が分かりません。「私も復活のイエス様に出会いたい」と願う人は「私の霊の目を開いて、イエス様が分かるようにしてください」と是非、祈ってください。また、教会学校の先生に祈ってもらってください。皆さんが復活のイエス様に必ず出会うことができ、大きな喜びが与えられますように。

♪よろこびはわがところに♪ (ホ132)

聖書 ルカ24・44～53 テーマ キリストの証人として

序論

(小泉 創)

誰もが人生の目的を求めています。夢に向かって努力していくことは素晴らしいことです。その夢がかなうことも、かなわずに願わなかった方にいくこともあるでしょう。でもどのような生き方に導かれたとしても、神が願っておられるのは、私たちがキリストの証人となることです。

一、主に心を開かれて

よみがえられた主イエスを前にして、弟子たちは喜びながらもなお信じがたい思いでいっぱいでした。主はよみがえられた証拠として、弟子たちに十字架の傷のある手足や、食事をなさる姿を見せられました。それは主が確かにからだをもつてよみがえられたのであって、霊ではないことの証拠でした。さらに主は、モーセの律法、預言書、詩篇、すなわち旧約聖書は、ご自分について書いてあり、それはすべて成就するとおっしゃいました

(44)。主がよみがえってくださったのは、単なる不思議な出来事ではなく、旧約聖書の約束の成就なのです。聖書を読めば、知識として知ることができます。しかしそれを事実と悟るためには、その人の心が開かれていなければなりません(45)。それは神のみわざです。

キリストの十字架での苦しみ、三日目のよみがえり、それらが私のためであった、キリストこそが私の救い主であると悟るためにも、聖霊のお働きが必要です。主によって子どもたちの心が開かれるように祈りましょう。

二、拡がる福音

キリストの十字架の贖いによって、悔い改める者に罪のゆるしが与えられます。まじめさや、真剣さ、熱心さが救うものではありません。救いは神からのプレゼントです。神にふさわしくないものが、恵みによってゆるされて、人生が新しくされていくことは何と素晴らしいニューズでしょうか。これが福音です。

この福音は、エルサレムからはじまって、もろもろの国民に宣べ伝えられると、主イエスは約束してくださいました(47)。まずエルサレム、そして周囲へと拡がって

いくのです。それはユダヤ人ばかりではありません。多くの国の人々が、主の教えを求めてくると、旧約の預言者も語っています（イザヤ2：3）。そのようにして、異邦人である私たちのところにも、福音は届けられました。私たちは教会学校に來ている子どもたちが、まずこの福音をしっかり受け取って生きていけるようにと願います。そして福音がその子たちを通して、その友達にも広がっていくように期待しています。福音はまだまだ広がっていく余地があります。主がなしてくださることに期待しましょう。

三、キリストの証人となるために

〈あなたがたは、これらのことの証人である〉と、主イエスはおっしゃいました。弟子たちは復活の主と直接お会いした証人です。それでも、彼らは神の特別な力を必要としていました。ペンテコステの日に聖霊に満たされた弟子たちの姿は、そのことをよく示しています。彼らは神を力強く賛美し、聖書の約束がイエス・キリストの上に成就したこと、キリストを十字架に追いやったのは人々の罪であることを語りました。それを聞いた者た

ちは強く心を刺されて、御名によって悔い改め、仲間に加わっていききました（使徒2章）。また、弟子たちの姿は、民衆の尊敬を受けていました（使徒5：13）。彼らの言葉だけでなく、生き方そのものが、キリストをあかしするものだったからでしょう。

私たちがキリストを証しするときにも、救いの確信、喜びは欠かせません。それに加えて人々への愛がなくては、騒がしいだけで無益です（1コリント13章）。御霊の実をいただいて、真実な証人とさせていただきたいのです（ガラテヤ5：22）。神はこの世にいる全ての者たちを、愛してくださっているのですから（ヨハネ3：16）。

結論

クリスチャンがこの世に送られているのは、神の愛のあらわれであるキリストを証しするためです。エルサレムにいる弟子たちからはじまって、遠く日本にまで広がってきた福音が、さらに多くの人々に伝えられていくために、私たちも光榮ある証人として用いていただきますように。

研究資料

(辻林和己)

今回の聖書箇所はルカの記す第一巻「ルカによる福音書」の終わりの箇所であり、次の第二巻「使徒行伝」につながる箇所でもある。主がここで予告されたことが使徒行伝で次々に実現していく。44〜49節は、主イエスがご自分の受難と復活が（旧約）聖書の成就であることを告げられる場面であり、50〜53節は、主の昇天を語る箇所である。

テキスト

44 わたしが以前あなたがたと一緒にいた時分に 主イエスが地上で弟子たちと「一緒におられた」十字架以前のときに、の意。主は今も彼らと「一緒におられる」が、そのありようは十字架以前と復活以後とは違う。復活された主ご自身と地上で生きている弟子たちは（完全に一つではなく）「離れている」（Ⅱコリント5・6参照）。話して聞かせた言葉 ルカ福音書では、18・31〜33。モーセの律法と預言書と詩篇 旧約聖書全体を表わす。45 聖書を悟らせるために 旧約聖書全体が主の受難と

復活を証言していることを理解させるために。

45 彼らの心を開いて ここでの「心」は（ギ）ヌース。ふつうは日本語では「理性」と訳される言葉。福音書の中でこの言葉が使われるのはここだけである。聖書を読む側の心が開かれなければ聖書を悟ることはできない。心を開いて下さるのは主である。

47 その名 イエス・キリストの御名。罪のゆるしを得させる悔改め 悔い改めと信仰は表裏一体であり（使徒20・21）、悔い改めと信仰によって罪の赦しを得られる（ペントコステ前の10日間、聖霊の光に従ってなされた弟子たちの悔い改めについては、『小島伊助全集1』195、196頁を参照のこと）。エルサレムからはじまって 使徒1・4、8、2・14等参照。「エルサレムから始まる」ことは、本書の続編「使徒行伝」の大きなテーマの一つである。もろもろの国民に宣べ伝えられる 世界宣教、異邦人伝道も旧約聖書に書かれていた（イザヤ2・3参照）。ルカは使徒行伝でさらにこの点を明らかにしていく（使徒10・43、26・22〜23参照）。

48 これらの事の証人 主イエスの受難と復活の証人、特に「主の復活の証人」の意（使徒1・8、2・32）。

49 父が約束されたもの 「聖霊」のこと(使徒1・5、

8)。**贈る**(ギ)エクサポステロー) 「遣わす」、「送る」

とも訳せる。未来的意味の現在形。近い未来のことを表わす。「今すぐ(間もなく)送る」。**上から力を授けら**

るまで 「上」とは「天」すなわち「神」の意。聖霊に

よって力を与えられるまで。**都** エルサレムのこと。後

に彼らは聖霊を与えられるまで祈った(使徒1・14)。ペ

ンテコステのとき弟子たちに聖霊が降り、この時以来、

彼らは「キリストの証人」として自分たちの使命と責任

を果たしていくことになる。

50 **ベタニヤの近く** ベタニヤはエルサレムから約28キ

ロの近さにある村(ルカ19・29、ヨハネ11・18)。使徒1・

12では昇天の場所はオリブ山。**連れて行き**(ギ)エクサ

ポステロー) 「外へ導き出す」。エルサレムのある家の

一室から外へ出て行ったことを強調している。**手をあげ**

て 両手を上げて。**祝福された** 「大祭司の祝福」(レビ

9・22)を思わせる場面。キリストは大祭司でもあら

る(ヘブル4・14、15)。

51 **天にあげられた** 使徒1・9参照。

52 **彼らはイエスを拝し** 「拝する」(ギ)プロスキュネ

オー)。ルカ福音書の中で、弟子たちが主イエスを礼拝

するという意味では、ここでだけ使われている言葉(他

には荒野の試みの記事で用いられている。ルカ4・7「ひ

ざまずく」、4・8「拝し」。ルカ福音書では、主イエス

の昇天後に、弟子たちが主を神として「礼拝する」よう

になったことを強調している。**非常な喜びをもって**こ

の福音書の2・10の主の御降誕を告げる御使いの言葉、

「…大きな喜び…」が弟子たちの心にも与えられたこと

を示す。

53 **絶えず宮にいて** ルカ福音書はエルサレム神殿での

祭司ザカリヤの礼拝から始まり(1・8〜10)、同じ神殿

にキリストを礼拝する弟子たちがいる場面で終わる。**神**

をほめたたえていた 「ほめたたえる」は原文では50節、

51節の「祝福する」と同じ言葉(ギ)ユーロゲオー)が使

われている。

参考図書 レオン・モリス「ルカの福音書」『ティンデル

聖書注解』(いのちのことば社)、榊原康夫『ルカ福音書

講解6』(教文館)、他

聖書

ルカ24・44〜53

タイトル

キリストを共有しよう！

暗唱聖句

あなたがたは、これらの事の証人である。

ルカ24・48

目 標

キリストによる恵みを知った者として、
キリストの証人として生きる。

導入

(飯田勝彦)

最近、誰かと何かを共有したことありますか？

今は、フェイスブックやインスタグラム、またはメールなどいろいろな情報が共有されます。美味しいお店や綺麗なものの、珍しいものの、穴場などが直ぐに多くの人たちに知れ渡るようになりました。

イエス様も約二〇〇年間、人から人へ共有され続けてきました。ベツレヘムの小さな田舎町でお生まれになったイエス様は、エルサレム、ユダヤ、サマリヤそしてこの日本、また世界中に今でも共有され続けています。

キリストによる恵みを知る

友だちから「聖書は厚い本だし難しいけど、簡単に言

うと何が書いてあるの？」と聞かれたら、どう答えますか？ そのヒントになるのが44節です。「モーセの律法と預言書と詩篇とに、わたしについて書いてあることは、必ずことごとく成就する」と。聖書にはイエス様について書かれてあります。イエス様が私たちの罪のために十字架にかけられ死んで墓に葬られ、三日目に復活して下さったのです。このイエス様を信じることで罪は赦され、神様の愛を体験することができます。そして、いろいろな苦しいことや悩むこと悲しいことがあったとしても、イエス様はいつも共に助けて下さいます。これは大きな恵みですよ。この恵みは自分の力で理解することはできません。イエス様が弟子たちに聖書を悟らせるために彼らの心を開かれたように、今はイエス様が、皆さんの心を開いてその恵みを知ることができるようにしてくださったのです。もつともつとイエス様によって心を開いていただき、私たちに与えられる恵みを頂きましょう。

キリストを証しする者に

イエス様が弟子たちの心を開いて理解して欲しかった恵みの一つに宣教があります。「そして、その名によつ

て罪のゆるしを得させる悔改めが、エルサレムからはじ

まって、もろもろの国民に宣べ伝えられる。あなたがたは、これらの事の証人である」(47、48)とイエス様は言われました。この「あなたがた」の中には、みなさんも入ります。イエス様の恵みはこれまで人を通して伝えられてきました。日本にキリストを初めて伝えたのはフランシスコ・ザビエルです。彼は天使ではなく、私たちと同じ人間でした。そして、今でも多くの人がキリストを伝えるに自分の家族や国を離れて、アフリカや南アフリカ、太平洋の島々や他の国々へ出かけて行っています。日本のクリスチャンも海外にまで行かなくても、自分の家族や地域の方々にイエス様を伝えていきます。

皆さんは、イエス様を信じてますよね。であれば、おめでとうございます！ 皆さんは、イエス様の十字架と復活を伝えるキリストの証人とされています。お互いに拍手しましょう。

日本には100人に1人の割合でしかクリスチャンがいません。少数派です。でも、その100人中の1人に特別に選ばれ、イエス様の恵みを伝える証人にされたのです。皆さんは特別な使命を任せられていることを心に留めて下

さい。

キリストを証しする力

イエス様を伝えることは簡単なことではないことをみんなも体験していると思います。ですから、イエス様を伝えることを恐れたり、あきらめたりしてしまうことがあります。でも、イエス様はそんな私たちの弱さをよく知っていてくださり、イエス様を伝えるために必要な力をも与えて下さるのです。イエス様は弟子たちに聖霊の力を与えると約束されました(49)。やがて約束の聖霊は弟子たちに与えられ、彼らはキリストの証人として力強く歩み、多くの人にキリストを伝えました。

まとめ

皆さんの家族や友だちなど、イエス様を知らない人がいるでしょう。イエス様の恵みを共有できるのは、クリスチャンしか出来ないことです。是非、この素晴らしい恵みを共有するキリストの証人として歩みましょう。

♪もちいたまえわが主よ (ホ113)

聖書 ルツ1・15〜18 テーマ ルツ

序論

(高橋頼男)

ルツ記は士師記の付録であり、サムエル記の緒言です。ダビデ家の起源を示すため、一つの意図をもって挿入された話です。ルツ記の主人公ルツは、モアブという異邦の女性でした。ユダヤから来てモアブに住み着いたナオミの子と結婚し、後に夫を失い、姑のナオミに仕えることを決意してイスラエルに来たのです。彼女は、ボアズとの再婚を通して、後に救い主の系図の中に組み込まれます。異邦人の女がイスラエルから出るメシヤの系図の中に入ること、真に意味深く驚くべきことです。

一、ルツの決断と信仰(15〜18)

故郷の飢饉が去って再び繁栄を取り戻したことを知ったナオミは、寄留の地モアブからベツレヘムに帰ることを決意しました。そして、死んだ息子たちの嫁をそれぞれの故郷に帰そうとします。オルパはナオミの意を受け入れて離れていきますが、ルツはあくまでも姑から離れず、異国の地にまで共に行くと言い張りました。ルツの決断と行動

は、姑ナオミに対する心からの愛と尊敬から出たものでした。夫に先立たれ、二人の息子を失った天涯孤独の姑ナオミに、生涯をかけて仕えていくことを選び取ったのです。当時女性が夫と息子を失い孫もいないということは、社会的な死を意味していました。それゆえナオミはまだ若いルツを説得してこの世の幸いを得るよう勧めました。しかし、ルツは姑と共にいることを選び、生涯をかけて姑に仕えることを切望したのです。彼女はこの世の幸福を超えたものを大切にしました。彼女は異邦の女性ですが、律法が命じる「あなたの父と母を敬え。これは、あなたの神、主が賜わる地で、あなたが長く生きるためである」(出エジプト20・12)という戒めを豊かに満たす生き方をしました。それで、彼女の行いと生活そのものが律法となっていたのです。「すなわち、律法を持たない異邦人が、自然のままでも、律法の命じる事を行うなら、たとい律法をもたなくても、彼らにとっては自分自身が律法なのである」(ローマ2・14)。また、かたより見ることはない神様にとつて、異邦人の彼女こそ真のユダヤ人であったのです。「外見上のユダヤ人がユダヤ人ではなく、…かえって、隠れたユダヤ人がユダヤ人」(ローマ2・28・29)です。

しかしまた、ルツの決断と行動は、信仰から出たものでもありました。彼女はナオミを通してその神その民を、自分の神自分の民として選んだのです。ルツは親族や友人たちから離れ、同国人との再婚の望みを捨て、望みのない一人の老いた姑と共に、見ず知らずの異国に行く決心をしてぶれることがありませんでした。このルツの決断は、アブラハムの決心と似ています。国を出て、親族に別れ、父の家を離れ、行く先を知らずして旅立ったアブラハムのあの信仰です（創世記12・1）。

ルツはまた約束の地に宿る信仰を抱いていた信仰者の仲間です。「…実際、彼らが望んでいたのは、もつと良い、天にあるふるさとであった」（ヘブル11・15～16）。

ルツは姑ナオミと行動を共にすると決めました。そしてナオミの行くところにとどこまでもついていくのです。それはクリスチャンが生涯をかけて愛する主にとどこまでも従っていくことの模範でもあります。「彼らは…小羊の行く所へは、どこへでもついて行く」（黙示録14・4）。ルツは優れた信仰と徹底的な従順を持っていた人でした。

二、ルツの報い（4・18～22）

姑ナオミに従ってユダヤの地に來たルツは、懸命に姑に

仕えます。異国の地におけるその純粋な仕える姿は、周囲の人々にも好意をもって受けとめられ、図らずも誠実で信仰深いボアズとの出会いが備えられていました。

ボアズとの正式な結婚を通して、ルツはメシヤの家系につながる者となつて行きます。ボアズからルツを通してオベデが生まれ、オベデからエッサイが、エッサイからダビデが生まれます（マタイ1・5）。そして、このダビデの末から救い主が誕生するのです。ルツという一異邦人女性の一家族の中で現された信仰が、やがて民族を越え、世界の大きな救いにかかわっていくのです。だれがそのようなことを想像することができたでしょうか。士師記からサムエル記に向かうイスラエルの歴史は不信仰が蔓延する闇と混沌の時代でした。そのような時代にあつて、神と人に忠実に仕えたルツの信仰は、荒野の中のおアシスのようにきよく慰めに満ちた信仰の物語です。

結論

神を愛し、人を愛して生きたルツの真実できよい信仰と愛の生活にならない、主に従い神に祝福される生活と生涯を送る決意をいたしましょう。

研究資料

(金井由嗣)

文脈と思想

最初に、千代崎秀雄『虹色の落ち穂』の冒頭部を一読して、「ルツ記」とその登場人物についてのイメージをつかんでおかれることをお勧めする。本書が旧約正典に入ったのは明らかにダビデ王との関係によるが、単にダビデの祖先についてのエピソードを記したというだけではない、豊かなメッセージが本書には込められている。

「ルツ記」は、苦難の人生を誠実に生き抜いた魅力的な女性たちの物語である。女性が男性に依存しなければ生きていけない社会、宗教に基づく民族共同体の狭さの下で、彼女たちは社会の規範に従いつつ、一對一の人間関係において誠実な愛情に基づいた行動をとり続けることでその社会の「狭さ」を乗り越えていく。「垣根を越える信仰」の豊かさを、彼女たちから学び取ることができ

る。
モアブ人であるルツが夫の存在なしにイスラエル社会に入っていくことは、ルツ自身にとっても、受け容れる側の社会にとっても、決して容易なことではない(申命

記23・3)。しかしルツは、イスラエルの神「主」に対する真実な信仰と、姑のナオミに対する真実な愛とによって人々の信頼を獲得し、更に亡夫の嗣業を残すという神の民の義務に忠実に行動することによって神の民としての資格を認められるに至った(2・11-12)。後にはダビデ王、そしてイエス・キリストの系図に名を連ねることとなったのである。

一方の主人公であるナオミの人柄について触れておく。ルツは明らかにナオミと共にいることを強く願うが故にナオミの神「主」を受け容れたのであって、その逆ではない。苦難の中でも唯一の神に信頼して明るく生き抜くナオミの豊かな人間性が、この物語のそもその発端である。この見地からすれば1・20-21の彼女のことばは自分の人生を嘆く愚痴ではなく、苦しみの中でも自分を客観視できる心のゆとり(ユーモア)の表れとみなした方がよい(千代崎)。

背景

レビラト婚と親族による「あがない」 申命記25・5以下に、子どもがいない夫婦の夫が死んだ場合、兄弟の一人が結婚するようにとの規定がある。この場合、最初

に生まれた子どもは法的には死んだ元夫の子として、その家名と土地を嗣ぐことになる（学界では「レビラート婚」と呼んでいる）。ルツ1・11は、この制度を前提として理解される。律法では兄弟についてしか書いていないが、エリメレク一家のように兄弟が皆死んでしまった場合、もともと関係の近い親族に拡張して適用されていたようである。土地の「あがない」（買い戻し）についてはレビ25・25以下にその規定がある。この二つの規定を同時に履行した場合、ルツと結婚する者はナオミが管理するエリメレクの土地を買い戻した上で、ルツとの最初の子どもをエリメレクの相続者として買い戻した土地を継がせる義務を負うことになる。

テキスト

15 自分の民と神々のもとへ帰っていきました 古代において、民族と宗教は不可分の関係にあった。モアブの民族神ケモシユを中心とする多神教世界がオルパとルツの本来の世界であり、夫の死後もナオミに忠実を尽くした後で元の世界に帰って行ったオルパの行動は当時の基準では十分に賞賛に値するものであった。

16 あなたの民はわたしの民、あなたの神はわたしの神

です 前記の理由から、ルツがナオミについてイスラエル社会に入ることは、ナオミの神「主」を自分の神とする「改宗」を意味した。自らの意思に基づくルツの決断は、当時にあつては極めて異例のことであった。ルツはナオミの人格に強く惹かれると共に、ナオミの人生の基盤が「主」を畏れる信仰にあることを認めていたのであろう。

17 そのかたわらに葬られます 出身民族の神を捨てることは、本来の同族社会との決別を意味する。年齢からいってナオミが先に死ぬことは当然予想されるが、その後も身より一つないイスラエル社会で生涯を終えることをルツの決断は含んでいた。**主よ、どうぞわたしを**イスラエルの神「主」に向かって誓うこと自体、ルツがすでに主を信じる信仰に生きていることを示している。すでに彼女はモアブ人の社会とその宗教に決別していたのである。

参考図書 千代崎秀雄『虹色の落ち穂』、レオン・モリス（ティンダル聖書注解）、K・D・サーケンフェルド（現代聖書注解）。

聖書

ルツ1・15〜18

タイトル
暗唱聖句

神に祝福された人ルツ（母の日）
 あなたの民はわたしの民、あなたの神は
 わたしの神です。
 ルツ1・16

目標

神を愛し、人を愛して、神に祝福された
 生涯を送る。

導入

（松浦みち子）

今日は「母の日」です。みなさんを生み、育ててくださっているお母さんに心から感謝を表しましょう。お母さん、ありがとう！ 今日のお話しは、義理のお母さんとお嫁さんの心温まる物語です。

ある一家の悲しいできごと

ある時イスラエルの国に、たいへんな飢饉ききんがありました。食べる物がなくなった時、二人の食べ盛りの男の子をかかえているお父さんが、「そうだ。となりの国に移住しよう！」と決心して、奥さんと二人の子供を連れてモアブという国にやってきました。お父さんの名前はエリメレク、奥さんの名前はナオミといました。二人の息子の名前は、マロンとキリオンといました。ところ

が思いがけない悲しいできごとがこの家庭を襲ったのです。一家の働き手のお父さんが死んでしまい、ナオミと二人の男の子が残されたのです。しかし、やがてふたりは立派な青年に成長し、それぞれ結婚しました。いったいどうしてこんなことが起こるのでしょう。またしても悲しいできごとが襲いかかり、二人の息子が次々と死んでしまったのです。今では、ナオミと息子たちのお嫁さん二人の三人だけが残されました。お嫁さんの一人はオルバ、もう一人はルツと言いました。

二人のお嫁さん

悲しみのどん底にいた時、年をとったナオミは主がイスラエルを顧みてくださり飢饉から救い出してくださいましたことを耳にしました。そこで、出身地であるイスラエルの国に帰ろうと一大決心をして、お嫁さんたちに言いました。「わたしはねえ、ふるさとへ帰ろうと思うの。」すると二人のお嫁さんは声をそろえて「じゃあ、お母さん、私たちも一緒にしますわ。」と言い、さっそく三人は荷物をまとめ、イスラエルに向かって出発しました。しかし、ナオミは旅の途中で、ふと足を止め「あなた達にお話しがあるの。」と言いました。「お母さん、何でしょう？」ナオ

5月

12日 礼拝メッセージ例

ミはお嫁さんたちにこう言いました。「今まで、息子やわたくしに親切にしてくれてありがとう。あなたがたはまだ若いことから、自分の家に帰りなさい。神様があなたがたを祝福し、幸せにしてくださいように。」「お母さん、何をおっしゃるのですか。私たちは一緒にいきます。」「と二人は泣きながら答えました。しかし、ナオミは二人の将来を思いやって「お帰りなさい。もう、わたしにはあなたがたの夫になるような息子はいないのだからね。ふるさとのモアブに帰って幸せに暮らなさい。」「二人はまた声をあげて泣きました。なお続いてナオミが強く勧めるので、ひとりのお嫁さんオルパは、泣く泣くナオミにお別れを言ってモアブの国に帰っていきました。

ルツの決心

ところが、もうひとりのお嫁さんのルツは、ナオミにすぐりついて離れようとしません。「ほら、オルパは帰って行きまししたよ。あなたもそうしなさい。」ナオミがそう言うと、ルツは答えました。「いいえ、お母さん。わたしにお母さんから離れて家に帰ることを勧めないでください。わたしはお母さんのふるさとと一緒にいて行きたいのです。お母さんがどこに行かれても、お母さんの

行かれる所にわたしも行き、お母さんと同じところに住みたいのです。お母さんのふるさとイスラエルの民は私の民、あなたの神はわたしの神です。」と、涙ながらに懇願します。ルツはナオミの息子と結婚し、ナオミと生活を共にするうちにナオミの信じるイスラエルの神様を信じるようになったのですね。モアブの偶像を捨て、生涯、真の神に従って行こうというルツの信仰告白でもありました。さらにこうも言いました。「お母さんの死なれる所でわたしも死に、そのそばに葬られたいのです。もし死に別れでなく、わたしがお母さんと別れることがあれば、神さまどうぞわたしを罰してください」と。ルツは何とナオミを愛し敬っていたことでしょう。そして何と深く神様を信じていることでしょう。ルツにとっては、ナオミと離れることはその信仰を失うことでもあったのですね。ナオミと行くこれからの未知の世界でどんなことが待ち受けているか知れない不安、夫と死別するとうような試練を通してつちかでもゆるぎない信仰をルツはナオミをとおして培っていたのです。ルツのひたむきな心、神様に従って行こうとする姿勢は、私たちの模範ですね。

♪ひとあしひとあし♪（ふ32）

聖書 Iヨハネ5・1～5 テーマ 神の子として

序論

(石田高保)

イエス様を受け入れた人が神の子とされていることは、聖書の断言している事実です。では神の子はどのように生きる事が求められているのでしょうか。

一、神の子であることを認める

〈すべてイエスのキリストであることを信じる者は、神から生れた者である〉、私たちが神様から生まれたとは、なんと驚くべき言葉でしょうか。このことは次のみ言葉にも通じています。「その名を信じた人々には、彼は、神の子となる力を与えたのである」(ヨハネ1・12)。イエス様を受け入れるとは、イエス様により頼む、心の拠り所とする、自分の人生をお任せすることです。イエス様を受け入れたならば、その瞬間に神の子として神の国に生まれます。三位一体の神の家族に迎え入れられるのです。通常、親子の関係は切れることがないように、神の子どもとしての立場は一生涯続き、さらに天国に行って永遠に続きます。子どもとしての出来不出来には関係がありません。なぜならク

リスチャンは神様から直接生まれたからです。「それらの人は、血すじによらず、肉の欲によらず、また、人の欲にもよらず、ただ神によって生れたのである」(ヨハネ1・13)というみ言葉がそれを裏付けています。親がクリスチャンだから自動的にクリスチャンになるのではなく、自分の選択と決心によってイエス様を受け入れることで神の子になるのです。家の宗教がキリスト教でなくても全然かまいません。ひとり一人のクリスチャンが直接一対一で神様とながっているからです。

では私たちは自分が神の子とされていることをどれだけ思うことがあるでしょうか。物心がついた時から自分は神の子であると自覚した人はイエス様を他にして一人もいません。イエス様を受け入れた時に、「あなたは神の子になったのですよ」と教えてもらってわかることです。もちろん人間が思いついたことではなく、聖書に基づく真理です。「これから私があなたの父親になります」と神様が宣言して下さったようなものです。

二、世に勝つ者であることを認める

神様が私たちの父親であるということは、一生を通じてその保護を受けるということですから、神様は私たちの保

護者ということです。しかしそれにとどまらず、同じ神の子とされた人々を愛するように変えられています。〈すべて生んで下さったかたを愛する者は、そのかたから生れた者をも愛するのである〉と言われ、神様を愛する人は、ほかの神の子を愛することができるのです。これは身近な人を愛する力の源が神様にあることを示しています。裏返せば私たちの内側にはその源がないということになります。つまり人を愛するためには、その都度その都度、神様から愛する力を注いでいただく必要があります。愛は物質のように自分の内のためにため込んだり、蓄えたりすることはできません。

また人を愛するとは神の戒めの究極であると言われています。〈神を愛するとは、すなわち、その戒めを守ることである〉とありますが、それは「どんな戒めがあっても、結局『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ』というこの言葉に帰する」(ローマ13・9)とありますので、つまるところ戒めを守るとは、身近な人を愛することになります。神を愛することと人を愛することとは別々の営みではなく表裏一体です。〈そしてその戒めはむずかしいものではない。なぜなら、すべて神から生れた者は、世に勝つからで

ある。そして、わたしたちの信仰こそ、世に勝たしめた勝利の力である〉とあり、神様は私たちを世に勝つ者、つまり好き嫌いや憎しみや無関心などに打ち勝つ者へと造り変えてくださったので、隣り人を愛するという戒めは難しくないのです。いや難しいと言って避けることは神の子にはできません。なぜなら身近な人を愛する愛をいま与えてくださいと神様に求めれば、与えられるからです。だから私たちは勝利者です。〈世に勝つ者はだれか。イエスを神の子と信じる者ではないか〉とありますが、次の言葉によっても裏付けられます。「あなたがたはこの世ではなやみがある。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている」(ヨハネ16・33)。

結論

イエス様を受け入れた人は間違いない神の子であり、神と人とを愛するように造り変えられています。それは人間的な感情を乗り越えるという世に勝つ力をいつでも注いでいただけることです。このような勝利者とされていることを認め、身近な人を自分のように愛し、自分を与えてゆきましょう。

研究資料

(加藤 満)

手紙の主題は「永遠の命」である。螺旋形らせんのように、この手紙は再三前に述べた地点に戻りつつ、一歩ずつ前進しつつ検証と議論を重ねていく。その中心部に永遠の命があり、過去に与えられ、現在に宣言され、経験されているものとして(1・2)描かれている。

永遠の命による神との交わりは、実際の生活からかけ離れたものとして描かれない。神に生み出された共同体は、その宗教体験(2・4)と振る舞い(2・10)によって、神に敵対するこの世と特徴的に対置されている。

その上で自らが「神の子」とされている事実の豊かさ
と使命を描いている。

テキスト

1 神から生れた者である ヨハネの手紙の後半部の主題は「信じる者達が神から生まれる」ということである。誕生は逆戻りする事ができないものであり、段階的に起こるものでもない。神から生れた者は正にその理由のために、罪を犯す事を容認されることはない。そのかたか

ら生れた者をも愛するのである ここでは普遍的な愛より、出生を同じくする兄弟愛を語っている。ヨハネの手紙における兄弟愛や互いへの愛は、排他的ではないが共同体の仲間の愛を意味している。共同体の愛は、財を困窮している兄弟と分け合う中に明らかにされ(3・12)、愛はこの世と区別を生み出し(3・11)、愛の交わりの内に神が見えるものとなる(4・12)。

2 戒め 戒めは神を起源とする戒め。イエスのみ言葉の行い、愛することである(2・3～6)。イエスが律法の要求を「神を愛し、隣人を愛する事」に要約して言われた事と重なる(マタイ22・36～40)。キリストは律法を破棄ではなく成就する為に来られた(マタイ5・17)。知るのである 信仰者は「神学的な真理」(3・5)と「宗教的な確かさ」(3・14)の双方を知る。それは、既に事実となっている事をイエスご自身、または聖霊によって知ることである(2・20、27)。

3 神を愛する…戒めを守る この二つは同義的に並べられる。戒めを守るといふ愛の行いは、神の内住という「見えない現実」を確証する見える現実である。神が現臨するのは愛においてであるということを示している。

4 なぜならと理由が説明される。それは神から生まれた者が「世」ではなく、世に勝利されたキリストに所属しているからである。「神の子」とされた事實は、信仰者の本性を造りかえ(3・1)、罪からの解放は、特定の行為からの解放に留まらず、罪が信仰者の如何なる場も占領しきることがなく、悪い者が手を触れる事のできない領域に属しているという事を意味しているのである(5・18)。こうして必然的に神から生まれるあらゆるものは、神に敵対している世、御子の救いの対象である世(ヨハネ3・16)に打ち勝つのである。

神の子であるという事實は待ち焦がれている目標でも、将来完全に実現される目標でもない。それは「既に与えられた現実」である。そしてそれは、人の成長途上の未熟さの上に起点を置いていない。「神が生んだ」という神的起源の上にあるのである。

5 イエスを神の子と信じる者ではないか 「イエスは神の子(神)である」という告白は「イエスのキリストである」という1節の告白と釣り合いがとられており、御子イエスと御父なる神との関連を証言している(2・23)。

御子イエスが既に世に勝利された(ヨハネ16・33)。そのイエスこそキリストであり、神であると信じる者は、神によって生まれた者であり(5・1)、神の言葉が内に留まり(2・14)、偉大なるイエスの勝利に連ねられ(4・4)、悪の世とは対照的な「愛」に生きる共同体を生み出すのである(4・7)。

ヨハネの手紙を通し、神の救済の行為と人間の倫理的努力に対する要求の間に緊張関係がある。しかし、道徳的な振る舞いは決して神との関係を造り出したり維持したりするものとしては理解されていない。むしろそれは、関係の「実り・試金石」である。神との関係と振る舞いは互いに依存している。ヨハネはその命の豊かさ、その内に自己欺瞞がないかを私達に問いかける。

参考図書 J・D・G・ダン編 山岡健訳『ヨハネ書簡の神学』(新教出版社)、津村春英著『ヨハネの手紙一の研究』(聖学院大学出版)、他

聖書

Iヨハネ5・1〜5

タイトル

世に勝つ神さまの子ども

暗唱聖句

すべてイエスのキリストであることを信じる者は、神から生れた者である。

Iヨハネ5・1

目 標

信仰により神の子とされたことを自覚して生きる。

導入

(松浦みち子)

皆さんは、毎日の生活の中で、どんなことを思いながら過ごしているでしょうか。ゲームやスマホ、遊び、勉強、部活、塾のことなど、いろいろな忙しくすごしているのではないですか。今日は皆さんに宛てて書かれた一通の手紙をいっしょに読みたいと思います。この手紙は、イエス様のお弟子さんのヨハネが、愛する人たちに宛てて書いた手紙です。「ヨハネ? そんな人、知らないや!」まあまあ、そんなこと言わずにいっしょに読みましょう。

神から生まれた者

手紙を書いたヨハネは、イエス様の弟子の中で一番長生きした人です。そして最期はどうなったと思う?

イエス様を信じているという理由で、迫害にあい、パトモスという島に島流しになってしまいました。そこで神様から示されたこの世の最後の事、また神様のすばらしい預言の言葉を「黙示録」として書き残して死んだのです。ヨハネは迫害にあっても、島流しになってもへこむことはありませんでした。いつも人生の勝利者でした。ある人は、いじめにあつたといつて死にたいと思うほど悩み苦しむ人がいるかもしれません。またひきこもりになつてしまふかもしれません。なぜ、ヨハネはいつも人生に勝つ歩みができたのでしょうか。その秘訣が、この手紙に書いてあるのです。このお手紙は、今を生きるわたしたちにも宛てて書かれた手紙なのです。

まず、イエス様をキリスト、救い主と信じる者は、神から生まれた者である、と言っています。神から生まれるっていったいどういうことでしょう。皆さんはお母さんのお腹から「おぎゃあ!」といつて生まれてきました。神から生まれるためにもう一度お母さんのお腹に入ることはできませんね。ヨハネは手紙を書きながら、イエス様のところに、夜、人目を避けてたずねて来たニコデモという立派な先生のことを思い起こしていたのかもしれませんが。ヨハネ

はいエス様とニコデモさんの会話をそばで聞いていました。ニコデモさんにイエス様はこう言いました。「だれでも新しく生まれなければ、神の国を見ることはできない。」ビックリしてニコデモさんはとっさに言いました。「年を取ってから生まれることが、どうしてできますか。もう一度、母の胎にはいつて生まれることができませんか。」イエス様は「わたしが、あなたがたは新しく生まれなければならないと、言ったからといって不思議に思わなくてもよいですよ。」と言いました。

皆さんは、神から生まれる、新しく生まれるっていうことを知っていますね。「イエス様、わたしは罪人でしたが、あなたの十字架がわたしの救いであつたことを信じます。」といって救われることですね。

イエス様を信じ新しく生まれると、心から喜びが湧いてきます。「どうしてかわかるかな ぼくらのうれしいわけそれはね イエスさまが救ってくれたから 十字架の血しおによって心の罪をゆるされ うれしいなうれしいな 救われたのだから」さんびが湧いてきますね。

世に勝つ者

イエス様を信じ、神から生まれた者は、世に勝つことが

できるとヨハネは手紙で教えてくれています。世に勝つとは、いつたいどういうことでしょう。オリンピックでメダルを取るとか、受験をして難関の学校に合格するとか、そのようなことはありません。わたしたちの心の中には、自分でどうすることもできない罪の性質があります。また、目の欲や持ち物の誇り、地位のほりなどがあります。しかし、イエス様を信じて神から生まれた者となるとき、わたしたちはイエス様に似たものに変えられ愛に生きる者とされるのです。世に勝つ者は、愛する者です。そして、神の戒めを守り、行うことができる力をイエス様が与えてくださるのです。イエス様は十字架にかけられる前の夜の食事の時こうおっしゃいました。「あなたがたは、この世では悩みがある。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている。」

また、一生、主に仕えどんな困難や辛い事があつても伝道したパウロは、「わたしを強くして下さる方によって、何事でもすることができ。」と言っています。わたしたちも、イエス様を信じ神の子とされたことを心にしつかり覚え刻みつけ、神と共に生きる者となりましょう。

♪どうしてかわかるかな♪(ふ4)

聖書 エペソ2・19～22 テーマ 神の家族と共に

序論

(石田高保)

神様は、すべての人が神の子となることを願っております。誰でもイエス様を受け入れることによって、神の子となることができます。しかし生まれた子どもが健全に育つために家族が必要のように、神の子とされた人にも、神の家族が必要です。神の家族とは、共にイエス様を愛し、仕えるクリスチャンの集まり、つまり教会のことです。聖書ではこの一か所しか出てこない言葉です。

一、神の家族に迎え入れられる

まず神の子とされる方法です。そもそも、なぜ神様は人間を神の子としようとするのでしょうか。神ご自身の中に、父、子、聖霊の三位一体という家族関係を持っておられ、その中に私たちを招き入れ、すべての良いものを私たちと分かち合いたいと願っておられるからです。C・S・ルイス曰く「三位一体の關係は、人間の親子や夫婦とは違うが、人間の家族關係の由来である」。しかしすべての人が初めから神の子なのではなく、イエス様

を受け入れることによって神の子とされるのです。また神の子の特権は何でしょう。神の子として生まれ変わった人は、神の家族として受け入れられます。〈そこであなたがたは、もはや異国人でも宿り人でもなく、聖徒たちと同じ国籍の者であり、神の家族なのである〉。そして永遠に残る相続財産を受け継ぎます。さらに神の子であるしは何でしょう。それは洗礼であり、信じた人に神の下さるプレゼントです。洗礼にはおおよそ次のような意味が込められています。①罪の赦しと聖めのしるし。神は洗礼をとおして神の子のしるしを与え、天国への道を歩ませてくださいます。②自分の信仰を公に宣言する。ちょうど生涯連れ添うことを決心した男女は、結婚式を挙げることによって、社会に受け入れられ、結婚したことが動かぬ事実になるように。③古い自分に死んで、キリストにある新しい命に甦ったことを表明する。このように洗礼を受けることによって、イエス様を受け入れた事実が、心に刻まれます。

二、神の家族として関わり合う

神の家族は血縁をしのぎます。クリスチャンはお互いに対して、父、母、兄弟、姉妹、言うならば、キリスト

の血による血縁者です。「ごらんなさい、ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。神のみこころを行う者はだれでも、わたしの兄弟、また姉妹、また母なのである」(マルコ3・34-35)。私たちの肉親もそうですが、神の家族は、神が知恵をもって私たちの周りに置いて下さっている関係です。しかも地上だけではなく、永遠に続くのです。日本人は血縁関係を重んじます、このことだけでも神の家族は血のつながりを軽く超えています。不思議と、初対面のクリスチャンでも、懐かしさを感じます。ですから私たちは単に自分の霊的な必要を満たすためだけに集まるのではなく、神の家族と人格的な交わりを持つためにも集まるのです。

また神の家族は少人数を単位とします。教会全体の礼拝という、いわば大家族だけでは、人は十分にケアされません。親も兄弟もはつきりしないような家族で育ったという人はいないでしょう。神の子が健全に成長するためには、プライベートで親密な小グループという核家族も必要です。むしろ少人数の人間関係の中でこそ、愛の実践を行いやすいのです。交わりはキリストに似た者として成長するためにも欠かせない要素です。「子たちよ。

わたしたちは言葉や口先だけで愛するのではなく、行いと真実とをもって愛し合おうではないか」(イヨハネ3・18)。牧師から霊的なケアを受けるだけにとどまらず、自立したクリスチャンとして互いに牧会し合いましょう。

さらに神の家族は外向きです。クリスチャン同士が神の家族として受け入れ合い、愛し合い、仕え合うことは、クリスチャンでない家族や身の周りの人を愛して行くための備えともなります。「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ」(ローマ13・8-9)。身近な人を救いに導くためにも、神の家族と関わることは必要です。むしろ神の家族で愛し合うという訓練を通して、身近な人を愛して行くことができます。特に家族を導こうと思つたら、自分以外のクリスチャンと親しく接することが有益です。

結論

天国は、神の子たちが愛し合う所です。教会は、天国での生活に備えて、互いに愛し合うことを身につける関係でもあります。私たちは永遠に続く神の家族の交わりに入れられているのです。こうして与えられている教会という神の家族を、その名前にふさわしく、行いと真実とをもって関わり合って行くことはありませんか。

研究資料

(宮澤清志)

今週のテーマは「神の家族と共に」である。先週のメッセージを通して、私たちは信仰によって神の子とされたと語られた。であるならば、私たちは神の家族として生きる特権が与えられているのである。本日の説教では、そのことを確認したいと思う。

テキスト

19 そこで 前節までの言葉を受けて。すなわち、本章1〜13節は、神から遠いものであった「あなたがた」異邦人が、イエス・キリストに結びつくことによって近い者となったことを語り、15節からかその結果としての「神との平和」について語る。その結果、「あなたがた」は「神の家族」なのである、というのである。異国人 文字通り「外国の人」という意味の言葉。宿り人 「家のかたわらの人」というような意味の言葉であり「隣人」を意味する。その国の中に住まいを持ちながら、国籍や市民権のない人を指して用いられる。ここでは、「異国人」も「宿り人」もあまり区別はなく、「イスラエルの国籍」(12)のない者の意味であろう。家族 とは、ここでは「一つ

家の中に住む人々」を指す言葉である。この言葉は、核家族時代の日本の事情とは異なり、肉親に限らず幅広く「親族」も「親友」も指すことのできる言葉である。同時にこの言葉は、新約聖書では1テモテ5・8「その親族を、ことに自分の家族をかえりみない場合には、…」でも用いられていることとおり、厳密な意味で「家族」として用いられていることからすれば、パウロはここで、異邦人キリスト者も真の意味での「神の家族」である、と語っているであろう。

20 ここにきて、パウロは「聖徒たち」を建物にたとえて、その構造を「土台」と「かしら石(礎石)」として語る文章である。

まず、この節の中心である「土台」と「かしら石」についてである。「土台」とは、建物の底部にあつて、その建物を支えるものであり、その建物の基礎部分を指すものである。一方「かしら石」とは、他の聖書においては様々に訳されている言葉であり(新改訳聖書は「礎石」、新共同訳は「かなめ石」など)、建物の要の石として、その建物を完成させるためにはなくてはならない最も重要な石である。特に、当時の建築においてはまず始めに隅

に親石を置いて、そして礎石、そして次々に石を組み合わせて、そして最後に「要石」をはめ込んだようである。ここで「わたしはアルパであり、オメガである」(黙示録22・13)というみ言葉を理解したい。キリストなくしては建物はバラバラになり、それ自体が成り立たないのである。

次に、「土台」としてたとえられている「使徒たちや預言者たち」とは、新約時代の使徒たちや預言者たちであると理解されている(エペソ3・5、4・11参照)。しかし、この当時はまだ新約聖書は完成されておらず、「土台」とは、「使徒たちや預言者たち」の働き、宣教の内容ということができる。

しかし、ここにおいてはそれ以上にその「土台」の中心である「かしら石」が、より重要な位置を占める。すなわちそれは「キリスト・イエスご自身」ということになる。このことは、すでに旧約聖書によって預言されていたものであった(イザヤ28・16、詩篇118・22等)

21 このキリスト 前節にある「キリスト・イエスご自身が隅のかしら石である」というみ言葉を受けている。隅のかしら石であるキリストによって、21、22節に語ら

れていることの一切が実現・成就するのである。建物全体 もとの言葉からは、「その建物の全体」と「あらゆる建物」という両方の訳が可能であるが、「建物の全体」という訳の方が主流である。組み合わされ 建物のいろいろな部分部分が「組み合わされて」、その建物全体を構成している、という意味に理解できる。なお、この言葉の直訳は「ともに関節になる」という言葉である。関節は、単なる節目やつなぎ目ではなく、力を伝えるための人体にとって欠くべからざる大切なものである。

22 主にあつて 前節の「キリストにあつて」と同義。共に建てられ 「組み合わされ」(21)の言い換え。霊なる ここではいくつかの訳がなされている。①「霊的に」という意味。霊的な住まい、という理解ができる。手で造られたユダヤ教の神殿との対比の中で語られている言葉。②「御霊によってともに建てられ」という意味。キリストにあつて成長し、御霊にあつて建てられる、という理解となる。③「御霊によって」これは、御霊という形で神が住まわれる、という理解となる。

参考図書 榎原康夫著「エペソ人への手紙(上)」、(いのちのことば社) 他

聖書

エペソ2・19～22

タイトル

神の家族

暗唱聖句

そこであなたがたは、もはや異国人でも宿り人でもなく、聖徒たちと同じ国籍の者であり、神の家族なのである。

エペソ2・19

目標

神の家族の一員として生きる。

導入

(松浦みち子)

あなたの家族は？ 大家族ですか、それとも小家族ですか？ 教会は神の家族といわれますが、どんな意味があるのでしょうか。

神の家族

パウロは、「あなたがたは、もはや異国人でも宿り人でもなく、聖徒たちと同じ国籍の者であり、神の家族なのである。」といってエペソ教会の人宛に手紙を書きました。「異国人」とは、外国から訪問してくる人々を指します。皆さんは外国旅行をしたことはありませんか？ パスポートがなければ入国ができませんね。パスポートは旅行する人が、どこの国の人か身分を証明するものです。

また「宿り人」とは、旅行する人よりも長期間滞在を許可された人ですが、その国の人と同じ権利はないので不自由な生活を強いられます。パウロは、「キリストにある人は、異国人も宿り人でもなく「一つの国民」とされ、父なる神様を家族の長とし、御子イエス様を長子として神の家族であると、記しています。

イエス様はベテスダの池のほとりに38年間もいた病人を安息日に癒されました。それをとがめたユダヤ人に、「わたしの父は今に至るまで働いておられる。」と答え、神を自分の父と呼んでおられました。

新聖歌22「御神の愛をば」という聖歌の4番の歌詞に「御神はわれらの父親なれば 御子なるイエスをば『兄上』と呼ばん 世人よ親しみ 互いに助け 御旨の成る日を忍び待てかし」とあります。

わたしたちも神の家族

そんなイエス様は、わたしたちクリスチャンがご自分と父なる神との関係を持てるようにして下さったのです。弟子たちにお祈りを教えられた時、「あなたは祈る時、自分のへやにはいり、戸を閉じて、隠れた所においてになるあなたの父に祈りなさい。すると、隠れた事を

見ておられるあなたの父は、報いてくださるであらう。」とおっしゃっています。また復活されたあかつきにはマリヤを通してこう語られました。「わたしは、わたしの父またあなたがたの父であって、わたしの神またあなたがたの神であられるかたのみもとへ上って行く」と、新しい家族の誕生を予告されました。

家族はひとつとなって集い住まわなければ意味をなしませんね。本来家族は、父なる神がご自分の子どもたちに、神様と人との関係を正しく伝えるために設定された最小の単位です。父は子どもに、子どもはまたその子に神様はどんなお方かを伝えるところに家族関係が確立されていきました。しかし、人は神のもとから遠く離れ、神を見失ってしまったのです。

わたしたちがイエス様の十字架の血できよめられ救いにあずかったならば、わたしたちの国籍は天に登録され、神の家族として迎え入れられるのです。そして、神を父とし、御子イエス様を長子とし、救われた人々は兄弟姉妹として地上の家族としての交わりが与えられるのです。イエス様がこの世に遣わされた目的は、十字架の血によって新しい家族を生み出すための新しい契約が結ば

れ、教会を生み出すためだったのです。そして、クリスチャン同士が互いに助け合い神の家族として永遠の家を築き上げるためでした。

霊なる神のすまい(教会)

地上の教会は、神の御住まいとなるということのパウロはここで書き送ります。天地を創造された神は、モーセに天幕を作することを命じられ、そこに臨在され、栄光をあらわされました。また、ソロモン王は神殿奉献の時、「神は、はたして地上に住まわれるでしょうか。見よ、天も、いと高き天もあなたを入れることはできません。：しかし、あなたが『わたしの名をそこに置く』といわれた所、：すなわちこの所に向かって祈る祈りをお聞きください」と祈りました。同じように神は、わたしたちが霊なる神の御住まいになることを願っておられます。イエス様ご自身を隅のかしら石とし、使徒たちや預言者たちが土台となって、選ばれたクリスチャンが一つ一つの素材として組み合わせられ建て上げられるのです。神のからだなる教会を共に建て上げ、栄光をあらわす神の家族の一員となるよう励みましょう。

♪イエスさまがきょうかいを♪(こ改118)

聖書 ヨハネ13・34・35 テーマ 愛によって

序論

(小泉 創)

イエスが十字架におかかりになる前の夜、弟子たちに新しいいしめを与えられました。それは私たちひとりひとりに日々、語られているいしめです。

一、新しいいしめ

主が与えてくださった新しいいしめ、それは〈互に愛し合いなさい〉というものでした。私たちにはどうしても相性があわない人、好きになれない苦手な人がいるかもしれません。しかしイエス様は好きになりなさい、とおっしゃったわけではありません。愛し合いなさいとおっしゃったのです。

また、愛しているという言葉を使いながら、実際は相手を傷つけてしまったり、相手によって態度が変わるかもしれません。どこかで見返りを求めているかもしれません。好きな者だけを大切にしたり、その時の気分によって左されることもあります。そもそも罪びとは、自己中心

的にねじ曲がってしまっているのです。

そのように限界がある私たちの「愛」ですから、イエスは〈わたしがあなたがたを愛したように〉とおっしゃいました。

二、わたしがあなたがたを愛したように

私たちの愛の根本はイエス・キリストです。イエスが、私たちをどのように愛してくださったかです。

弟子たちはイエスと一緒に歩んできた日々を通して、イエスの愛を見聞きし、経験してきました。罪びとたちの友となり、病氣や障碍しょうがいを持った人々の孤独、つらさを癒し、多くの者たちに慰めを与えられました。

さらに、彼らはこれから十字架におかかりになるイエスのお姿を通して、愛が何であるかを知ります。それは全てをささげる愛です。罪びとをゆるし、そのために自分の命を捨てる姿です。

ヨハネは、「それによって、わたしたちは愛ということを知った」(Ⅰヨハネ3・16)と告白します。パウロがⅠコリント13章「愛の章」で描いている愛も、イエス・キリストを通して実現したものです。到底、私たちには手の届かない愛のように思えてなりませんし、イエスもそ

のことをよくご存じの上で、それでも新しいいましめを与えられたのです。私たちには神の助けが必要です。

三、キリストの弟子であると認められる

イエスは弟子である私たちが互いに愛し合うならば、わたしたちがキリストの弟子であることが認められると教えられました。しかし教会は「聖人」の集まりではありません。「罪ゆるされた罪びと」の集まりです。互いに愛し合おうと思いつつも、時に見当違いであったり、足りなかったり、おせっかいすぎて嫌がられることもあるかもしれません。勇気が出ずにひるむ時もあるでしょう。

それでもイエスが愛してくださったように、私たちが愛そうとする姿こそが、キリストの弟子であるとあかしすることになるということです。私たちは教会がもつ影響力をもち、脚光をあびるような働きができたら宣教が進むと思います。しかしイエスが私たちに求めておられることは、私たちが互いに愛し合うことです。それをあきらめなくなる思いを乗り越え、愛し合えるように主の助けを求めましょう。

一人の若い姉妹が、教会学校での教え方をしくじって

多くの人を傷つけてしまいました。そのため、他の教会員から教師をやめるようにという嘆願書を受け取りました。姉妹はとても傷つき、教会にも行けないと思いました。しかし牧師に勧められ、嘆願書を出した兄弟たちのために祈りはじめました。そのためには、神の特別な恵みを必要としました。求道者であるその夫は、妻への仕打ちを聞いて憤慨していましたが、このことを通して、救いにあずかったのです。「私は妻のことを聞いてから、怒りと憎しみで逆上していました。しかし妻は、毎晩彼ら一人一人のために祈るんです。妻の祈りをいらいらして聞いていたとき、その祈りは私のためにも必要だと思ったのです。『僕のために祈ってくれ。僕こそ神様の恵みが必要なんだ』。妻と並んでひざまずいて、私はイエス様を心にお迎えしました」（デニス・キンロー、「キリストの心で」より）。

結論

主がどのように愛してくださったかを深く味わい、主の弟子として互いに愛し合う者となりましょう。

研究資料

(小平徳行)

神の民には、多くの律法が与えられていたが、イエスは、ここでただ一つの戒めを提示された。「互に愛し合いなさい」との戒めは、イエスが十字架からられる前日、最後の晩餐の時に語られた。これはイエスが「この世を去って父のみもとに行くべき自分の時が来たこと」を悟り、弟子たちを「最後まで愛し通され」た場面である(13・1)。この日、イエスは弟子たちの足を洗い、手本を示され、またユダは晩餐の席を立て、イエスを捕える準備のために出て行った。このような事が背景にある中で語られたのがこの戒めであった。

テキスト

34 新しいいましめ 「新しい」とは、「これまで一度も

語られたことも聞いたこともない」とか「従来とは異なっている」という意味を表す。隣人を愛することは、旧約時代からの戒めであった(レビ19・18等)。ここでイエスは、なぜ「新しいいましめ」と言われたのだろうか。ヨハネも、互に愛し合うことは、古い戒めでありつつも、新しい戒めとしている(1ヨハネ2・7・8)。わたし

あなたがたを愛したように ここに新しさの内容を見ることが出来る。この新しい戒めは、かつての戒めに比べて、要求されているものが、非常に高くなっている。レビ19・18では「あなた自身のようにあなたの隣人を愛さなければならぬ」とあるように、この愛の基準は人間が自分自身を愛する愛であるのに対し、新しい戒めのそれは、イエスが人間を愛する愛である。ギリシャの古典では「愛」を「エロース」や「フィリア」という語で表現してきた。しかしここでは「アガペー」が使われている。それは、イエスによって表された神の愛を、人間的な愛と区別するためであった。人間的な愛は、自分を愛してくれる者を愛するなど、どこかに利己的なもの、打算的なものを含む。また親子の愛は、どんなに強くても限界がある。親であるから、子であるから愛するということ条件付きのものである。しかし、イエスは罪深い人間のために、ご自分のいのちを捨てて、惨たらしい、十字架刑を受けて下さった。敵さえも愛する、無条件の、無限の愛である。イエスは、その生涯において、苦難を通して、このような愛を実践されたゆえに「わたしがあなたがたを愛したように」という、これまでにない、新し

い愛の戒めを与えられた。それは、先にイエスが弟子たちの足を洗い、「わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするように」と手本を示されたことを通しても命じられている。

また、この戒めの新しさは、新しい契約と関連している。私たちは、神の愛はおろか、人間的な愛においてさえ、十分に行うことができないような者である。この新しい戒めは、生来の人間の力で全うできるものではない。しかし、イエス・キリストを通して結ばれる新しい契約により、神の民は、律法が心のうちに書き記され、霊が新しくされ、聖霊によってその戒めを行うことができるのである（エレミヤ31・33、エゼキエル36・26～27）。ユダが席を立てて出て行った時、イエスは「今や人の子は栄光を受けた」と言われた（31）。このユダの裏切りは、キリストの十字架の死と復活という、神による人類の救いのみわざの実現、新しい契約へと進む契機となった。ゆえにこの時に、イエスは「自分の時」が到来し、新しい時代の始まりを自覚されて、「新しいいましめ」を与えられた。

35 互に愛し合うならば、それによって、あなたがたが

わたしの弟子であることを、すべての者が認めるであらう。このように言うことによって、イエスは弟子たちが互に愛し合うことの重要性を強調している。この戒めを守り行うことは、イエスの弟子であることを示す特徴である。なぜならイエスの戒めを守ることは、イエスを愛すること（14・15、21）、イエスの愛のうちにいることの確かな証拠だからである（15・10）。ここにキリストの教会のあるべき姿が示されている。もし信者同士の間で愛がなければ、世に対する彼らの証しは無効となり、偽善者であることを明らかにすることになる。また、互に愛し合うことは、ヨハネの第一の手紙では、異端（グノーシス）に対して、正統な信仰の基準の大切な要素とされている（1ヨハネ2・18）。ただし、イエスの弟子であるのと外の人々から認められることは、互に愛し合うことの目的ではなく、あくまでも結果である。

参考図書 高橋三郎『ヨハネ伝講義 下』（待晨堂）、由木康『イエス・キリストを語る』（講談社獄術文庫）、ゲイルR・オデイ『NIV新約聖書注解5・ヨハネによる福音書』（ATD・NTD聖書注解刊行会）、Colin G. Kruse, John (The Tyndale New Testament Commentaries) 他

聖書

ヨハネ13・34〜35

タイトル

互いに愛し合おう

暗唱聖句

わたしは、新しいいましめをあなたがたに与える、互に愛し合いなさい。

ヨハネ13・34

目標

神に愛された者として、互いに愛し合う生き方を身につける。

導入

(飯田勝彦)

新学期が始まり三ヶ月目に入りました。新しい学年、新しいクラスには慣れましたか？もし、一年生になっても幼稚園生のような、また六年生になったのに三年生のような態度をしていたらどうでしょうか？高学年は自分の事ばかりではなく、低学年のことにも心を向けることが大切です。学年が上がれば、それにも心（ふさわ）を向ける度があります。それはクリスチャンも一緒です。クリスチャンには素晴らしい生き方が与えられていることを確認しましょう。

新しいいましめ

イエス様は弟子たちに「わたしは新しいいましめを与

える」と言われました。「新しい」とは、これまでとは違ったものです。イエス様はどんな新しいことを教えて下さったのでしょうか。それは「互いに愛し合いなさい」でした。「な〜んだ。それなら今までも聞いてきたよ」と思うかも知れません。確かに、旧約聖書にも「自分を愛するように隣人を愛しなさい」と書いてあります。ですから、他者を愛するとは決して新しいいましめとは感じません。

でも、イエスは「新しいいましめを与えます。互いに愛し合いなさい」と言われました。旧約聖書にある「愛しなさい」と、イエス様が言われる新しいいましめ「互いに愛し合いなさい」は、どこが違うのでしょうか。これまでの愛する規準は人間の方にありました。でも、新しいいましめの規準は、イエス様が愛されたように愛することだったのです。

愛する力

「互いに愛し合いなさい」をクラスの中で、家族で、地域で、習い事をしている場所で実践されたらどんなに素晴らしいことが起こるか想像してみましよう。あなたの家族が互いに愛し合えたら食事の時間がどんな雰囲気

になりますか？ また、あなたの学校のクラスのみんなが互いに愛し合えたら、クラスはどんな雰囲気でしょうか。毎日、互いに愛し合っているクラスにはどんな気持ちで行くでしょうか。互いに愛し合っている姿をイメージするだけでも笑顔が出てくるでしょう。

「互いに愛し合いなさい」と聞くと「分かっているけど、出来ない」という考えが湧いてこないでしょうか。すぐに嫌な人の顔が浮かび「無理むり！」と心の中で叫ばないでしょうか。「互いに愛し合う」ことは決して簡単なことではありません。私たちには隣人を愛する力はありません。「わたしには人を愛する力はありません。イエス様助けてください」と認めることが大切です。

イエス様が「互いに愛し合いなさい」と言われたとき、とても大切なことを言われました。それは「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」です。「わたしがあなたがたを愛したように」ですから、まず皆さんがこれまでイエス様からどのように愛されたかを知ることが大切です。イエス様はみんなをこれまでどのように愛してくださったでしょうか？ 少し思い出してみましょう。辛いときや悲しいとき、イエス

様はみ言葉を通して励ましてくださったでしょう。イエス様に「助けてください」とお祈りしたとき、イエス様は具体的に助けてくださったでしょう。寂しいと思ったとき「わたしはいつも共にいるよ」と慰めてくださったでしょう。友だちとケンカしたとき、イエス様は自分の悪かったところを示してくださり、悔い改めさせてくださったでしょう。そして、自分から友だちに謝ることができるように導いていただいたことがあったかもしれません。

時にはテストや発表会で緊張していた心に、イエス様は平安を与えてくださったでしょう。私たちはどれだけイエス様の愛を体験して来たでしょうか。愛する秘訣は、イエス様から受けた愛が力となります。

まとめ

互いに愛し合うことは独りではできません。イエス様の愛を知っている教会のお友だちや教会の方々と実践してみましょう。その中で愛する生き方が身についてくるのです。

♪あいをください♪（ホ78、イン67）

聖書 使徒1・6、14、2・1、4 テーマ ペンテコステ

序論

(小泉 創)

キリストの救いは誰のためのものでしょうか。旧約聖書にも、イスラエルのみならず、全世界に向けられた神の御思いを知ることができます。しかし世界宣教について弟子たちにはつきりとお命じになったのは、復活なさったキリストです。今このように、異邦人である私たちのところにまで福音が届けられていることこそ、神がすべての人を愛しておられることの証拠です。その最初の一步は、ペンテコステの日に始まりました。

一、待っていないで

イエスが天にあげられる前にも、弟子たちの関心は、イスラエルの政治的な行く末でした。しかしイエスは彼らの質問に答えることをせず、神がなさうとしておられることを告げられました。それは、聖霊が弟子たちに下るということです。「もう一人の助け主」である聖霊によって、弟子たちは力を受け、(エルサレム、ユダヤとサ

マリヤの全土、さらに地のはてまで)イエス・キリストの証人となるのです。イスラエルにとどまらず、世界中のすべてのところにまで及ぶ恵み! これは、決して弟子たちの中から出てきたビジョンではありませんでした。弟子たちも考えもしなかったことで、そのようなことが実現するとは到底思えなかったでしょう。イエスもいなくなってしまうのに、どうしてよいものか、戸惑ったかもしれません。彼らはただその約束の日を待ちつつ、祈るしかありませんでした。

二、聖霊がくだったときに起きたこと

五旬節の日(ギリシヤ語でペンテコステ)、過ぎ越しの祭りから50日目の収穫の祝いのその日、神の時が来ました。弟子たちが一つの家に集まっているときに、突然、激しい風が吹いてきたような音が家全体に響き渡ったのです。そして舌のようなものが、炎のように分かれて弟子たちの上にあらわれ、彼らは自分たちが知らなかった他国の言葉で、「神の大きな働き」を宣べ始めたのです。イエスが約束なさったように、聖霊が下ったのです。

各国から集まってきたユダヤ人たちは、ペテロが大胆

に語った説教を通して悔い改め、キリストの救いにあずかりました。これは世界中に拡がっていく福音宣教のスタートでした。これを始めてくださったのは神です。

三、イエスの証人となる

福音が世界中に届けられるためには、乗り越えなければならぬことがいくつもありました。ユダヤ人と異邦人の隔てを打ち壊し、乗り越えることもその一つでした。そのように弟子たちを導き、福音を拡げていかれたのは、聖霊であつたことが使徒行伝には記録されています。使徒行伝は、別名、聖霊行伝と言われるほどに、聖霊の働きが生きて示されています。

宣教は特別に勇気のある者たちが用いられてきたわけでもありません。ある時には迫害の中、やむにやまれずに散らされていった先で、主がお用いくださつたということもあります。またある時には、日常生活の中でクリスチャンがいつものように祈る姿を通して、教会に関心をもつ人が与えられたというあかしも聞きます。どのような時であつたとしても、聖霊によって助けられ、そして福音宣教のために用いられてきたということはかわり

ません。私たちの宣教は、内に住んでくださる聖霊の助けによってなされていくもので、それがどのように進んでいくのかは、私たちの思いを越えています。

多くのクリスチャンたちが歴史を通じて涙、汗、血を流し、それらが用いられて大きな救いの喜びが拡がってきました。私たちもその働きに加えていただいているのです。自分は小さなものにしか過ぎない、と思うことがあるかもしれませんが、神はどのようなものでも豊かに用いることができるお方です。聖霊の導きに従って福音を伝えて行きましょう。

結論

私たちにも福音宣教の使命が与えられています。聖霊の力をいただいで、用いていただきましょう。キリストが私たちにどのようなことをしてくださつたか、その愛の証人となって、すべての人に救いを伝えるのです。

研究資料

(辻林和己)

ルカは、第一巻(1・1)(ルカ福音書)で主イエスの行い、教え、昇天までを記した。そしてこの第二巻(使徒行伝)で、主イエスのお働きが、聖霊によって引き続きなされていく、新しい時代(聖霊の時代)の到来を告げる。今回の箇所では、主イエスの昇天(6・11)、屋上の間での祈り(12・14)、聖霊の降臨(2・1・4)の出来事を語られている。

テキスト

6 イスラエルのために国を復興なさるのは、主イエスは弟子たちに間もなく聖霊によるバプテスマを与えられると約束された(4・5)が、弟子たちはまだ十分には理解していなかった。彼らの関心は、イスラエルの国の「復興」、ローマ帝国からの政治的独立であった。

7 時期(ギ)クロノス は時間の経過を表す語。場合(ギ)カイロス は定められた時点を表す語。父が自分の権威によって定めておられる 時期や場合は、父なる神の領域に属することだから、それらを性急に知ろう

とすることは止め、神のご意思に委ねるべきである。

8 ただ、聖霊が…くだる時、…力を受けて、…わたしの証人となる 弟子たちがキリストの証人となる力は大聖霊によって与えられる。主イエスご自身が洗礼者ヨハネからバプテスマを受けられたとき、聖霊が注がれて(マルコ1・10)公生涯に入られた。彼らも聖霊を受けることにより、キリストの証人となり、主のみわざに励む者とされる。エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで 使徒行伝では、1・7章がエルサレム、8、9章がユダヤとサマリヤ、10・28章がカイザリヤからローマまでの弟子たちの宣教と各地での出来事が語られている。主イエスの言葉通り、この後、聖霊のお働きによって、弟子たちの宣教が拡大し、彼らの「イスラエルのため」というユダヤ民族主義的偏見や異邦人との壁を取り除かれ、異邦人の救いが成されていく。

9 雲に迎えられて 雲は、神の栄光を具現するもの(出エジプト40・34、マルコ9・7参照)。

10 白い衣を着たふたりの人 天使(御使い)のこと。

11 またおいでになるであろう 天の使いは、主イエスの昇天が、主ご自身の再臨につながる恵みの出来事であ

ることを予告している。

12 安息日に許されている距離 2千キュビト（出エジプト16・29、民数記35・5参照）（約900メートル）。

13 その人たちは、ペテロ、… イスカリオテのユダを除いた十一人の使徒たちの名が記されている。

14 特にイエスの母マリヤ、およびイエスの兄弟たちと共に 主イエスの兄弟たちは、主の復活の後に弟子に加わった。心を合わせて この言葉〔ギ〕ホモスユマドン〕は使徒行伝では10回使われている。ひたすら祈をしていた 彼らは聖霊を求めて継続した熱心な祈りをした。主イエスの40日間の顕現（1・3）の後、彼らは10日間、祈り続けた。

1 五旬節（ギ）ペンテコステ）は過越祭から50日目に行われる収穫の祝い。日がきて 原文では日が「満ちる」という意味の言葉が使われている。主イエスの言われた「父の約束」（1・4）に基づくすべての時が充満して、ついに聖霊がくだる時が来た。

2 激しい風が吹いてきたような音 この場面で起こった神による奇蹟は言語による描写を超えるので、辛うじて比喩的に表現されている。「風」は旧約聖書の中では、

（ヘル・アッハ）で、息、神の霊を表すものとして用いられている箇所がある（エゼキエル37・9～14等）。

3 舌のようなものが、炎のように分れて現れ 新改訳では「炎のように分かれた舌」。「分かれた舌」は、一人一人に聖霊が分与され、しかもすべてが一つの御霊であることを示している。

4 一同は聖霊に満たされ 主イエスの言葉（1・5）の成就。いろいろの他国の言葉で語り出した これは話し手自身が知らない言語を語る「多言語奇蹟」であり、「異言」とは区別される。

この後、ペテロが力強く宣教し、主の十字架の死と復活を語る（2・23～24）。教会そして私たちも、ただ聖霊の力とお働きのもとでだけ、復活したキリストの証人として生きることが出来る（1・8、1・22）。

参考図書 小野静雄「使徒の働き」『新実用聖書注解』、斎藤篤実「使徒の働き」『新聖書注解 新約2』（以上いのちのことば社）、他

聖書

使徒1・6～14 2・1～4

タイトル

ペンテコステ

暗唱聖句

ただ、聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであらう。

使徒1・8

目標

聖霊に満たされ、キリストの証し人として生きる。

導入

(和田牧子)

今日は、教会の歴史でとても大切な記念日です。教会の誕生日です。ペンテコステと呼ばれています。舌をかみそうですね。聖霊がこの世界にくだった日を記念して、それを忘れないように心にとめる日です。聖霊ってなに？と思う人もいますよね。イエス様は聖霊のことを、「もう一人の助け主」と言われました。

祈りながら待つ！

イエス様はわたしたちの罪の身代わりに、何の罪も持たれないのに、十字架にかかって死んでくださいました。

その後3日目によりみがえって、弟子たちや、女の人たちの前に現れました。みんなは、もう一度イエス様にお会いできて、お話ができて嬉しかったでしょうね。

ある日、イエス様はおっしゃいました。「ただ、聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるでしょう」。

そして、イエス様はみんなが見ている前で天に上げられ、雲の中にかくれて、そのお姿が見えなくなっていました。イエス様は、地上に住む弟子たちとは別の遠い、遠いところに行ってしまったのでしょうか。

天を見つめている弟子たちのそばに、白い服を着たふたりの人が立って、言いました。「イエス様は天に上げられたその同じすがたで、またおいでになりますよ」。

いつかはわからないけれど、イエス様がもう一度この世界にお越しくださるというお約束をいただいたのです。嬉しいですね！でもイエス様がお越しくださるまでは、どうやって神様への信仰を強くもって生きていけばよいのでしょうか？自分の信仰、力の弱さをいやというほど感じていた弟子たち、その仲間たちは、イエス

6月

9日 礼拝メッセージ例

様が約束してくださった「もう一人の助け主」が与えられることを求めて、とにかく祈ろう!と話し合いました。彼らはオリブ山を下り、エルサレムの市内に帰りました。そして泊まっていた家の屋上に上がって、祈りに祈り、ひたすら祈ったのです。弟子たち、女の人たち、イエス様の母マリヤさん、イエス様の兄弟たち、その数120名ほどの大人数です。

私たちが神様に真剣にお祈りし、心を一つにしてお祈りする時に、聖霊は働かれます。また祈ることもなく何かを成しとげようとしても、そこに聖霊は働かれず、神様のすばらしさは現れないのですね。

聖霊がくださった!

過ぎ越しの祭りから50日目の収穫のお祝いの日、弟子たちが一緒に集まっていました。するとどうでしょう!突然激しい風が吹いてきたような音が天から起こり、部屋いっばいに響きわたりました。また、舌のようなものが、炎のように分かれて現れ、ひとりびとりの上にとどまったのです。

そしてついに一同は、聖霊に満たされ、自分たちの知らなかった別の国の言葉でしゃべり始めたのです。

これがペンテコステの出来事でした。聖霊を受けた人たちはその後どうなったでしょうか。確かに彼らは変わりました。今まではイエス様の仲間ということで、悪口を言われたり、迫害されなかつたかと思われていました。その恐れがなくなつたのです。聖霊が心の内側にいてくださるということ、前よりもイエス様に近くなりまして。イエス様に喜ばれる心でありたいと祈り求める者に変えられたのです。

そして、熱心にイエス・キリスト以外に救いはないと、宣べ伝えるようになりました。いろいろな地方に出て行つては伝えました。神様が私たち人間をとつても愛してくださっていること、イエス様は私たちの罪の身代わりに十字架にかかって死んでくださり、そしてよみがえつて今も生きておられるということ…。

結び

私たちも、真剣に祈り求めるときに、聖霊が働いて、生きる力が与えられ、伝道する勇気が与えられますよ。そのことを信じて進んでいきましょう!

♪ヤッター♪(イッピー「YATTA やったー!」)
(イッピージャンHPで楽譜ダウンロードできます)

聖書 使徒3・1～10 テーマ キリストの名による歩み

序論

(石田高保)

私たちは生きている限り、自分のためだけでなく、誰かのために役に立ちたいと思います。誰かの役に立っていると自覚できる時、生きる喜びを感じるものです。クリスチャンは、人の役に立つだけでなく、内におられるキリストによってその人を生かす力が与えられているので、生きる希望と力をお分ちすることができず。

一、神は希望を与えようとしておられる

〈生れながら足のきかない男が、かかえられてきた〉、4・22では40歳あまりの人とあります。何十年も物乞いをして暮らしてきました。この個所を見る限り、彼の唯一の望みは、その日食べていけるだけのお金をもらうことだけだったようです。この後すぐに、自分が歩けるようになることなどは、全く想像もしなかったでしょう。目に見える世界がすべてでした。私たちの中にも、この男性のように将来を自分で見限っている人はいないでしょうか。未来には希望が抱けず、不安や諦めが横たわっているこ

とはないでしょうか。あるいはそういう人が身近にいないでしょうか。しかし将来を決して小さく見積もらないようにと願います。神は私たちの生活と生涯に丁寧に関わっていて下さり、たとえ困難な出来事に会っても、そのことを越えて新しい展開をなして下さるからです。

〈ペテロとヨハネとは彼をじつと見て〉、彼らは人生を諦め、希望を失ったこの男性を見たとき、内側から憐みの心と、イエス様なら何かをしてくださるという信仰が湧き上がりました。彼らはしゃがんで、この男の人と目を合わせました。苦しんでいる人を上から見下ろすのではなく、自分たちも同じ立場に身を置いて、彼の目線に立ちました。このことは私たちが身の周りの人とのように接すればよいかを教えられます。自分に悩みを打ち明けてくる人に対して、私たちは自分の経験したことであるかどうかに関わらず、共感できるように祈りましょう。それはすぐにアドバイスするのではなく、まずはその人の心の痛みを受け止められるように耳を傾けることです。ただひたすら聴くためには、自分の思いを十字架に付ける必要もあるでしょう。

この男性は、ペテロとヨハネとがへわたしたちを見な

さい」と、自分に声をかけて来たので、よっぽどたくさんのお金を施してくれるのではないかと期待しました。しかし「金銀はわたしには無い」という言葉にがっかりしたでしょう。ところがペテロはこの男性にとつて、お金よりはるかに大切なもの、彼の問題を根本的に解決するもっと良いものを提供しようとしていました。それは彼がイエス様を信じて、生きる希望を持つことであり、さらに歩けるようになり、自分で生計を立てられるようになる道です。私たちは身の周りの人の当座の問題が解決されることを主に助け求めると共に、その人の魂が救われるという根本的な解決を求めていると思います。

二、神は人をおして働かれる

しかし、わたしにあるものをあげよう。ナザレ人イエス・キリストの名によつて歩きなさい、この言葉を聞いたとき、イエス様ならこの自分を救ってくださる、いやしてくださるに違いないという信仰がこの人に働きました。これについてペテロは解説して、〈わたしたちが自分の力や信心で、あの人を歩かせたかのように、なぜ見つけているのか〉と、自分の力ではないとはっきり言い切っています。「イエスの名が、それを信じる信仰のゆ

えに、あなたがたのいま見て知っているこの人を、強くしたのであり、イエスによる信仰が、彼をあなたがた一同の前で、このとおり完全にいやしたのである」(3・16)。

〈イエス・キリストの名〉とは、復活して生きておられるイエス様ご自身という意味です。私たちもお祈りをした最後に〈イエス・キリストの名〉によつて祈ります、それは、今ここにおられるイエス様により頼んで祈るという意味です。「ふたりまたは三人が、わたしの名によつて集まっている所には、わたしもその中にいるのである」(マタイ18・20)、イエス様の名前には力があります。私たちも、これほどの力があることを信じて、イエス様の名前で祈りましょう。人に対しても声を出して祈つてあげましょう。事実、この出来事のように、生まれるながら40年間、歩くことのできなかつた人が、飛び跳ねるまでに瞬間的に癒されたのですから。

結論

あなたも、〈わたしにあるものをあげ〉ることが出来ます。それは「わたしの内に生きておられるイエス様の力」です。私たちはこれを周りの人に差し出すことができますのです。

研究資料

(宮澤清志)

テキスト

1 午後三時の祈のとき 夕べのささげものの時（出エジプト29・39以下）に続いて行われる祈りのとき。ユダヤ教では一日に3度祈りの時が定められている。使徒たちは、ペンテコステの後も律法を守り、ユダヤ人と同じように神殿での礼拝や祈りの時に集っていた。

2 生れながら足のきかない男 「生まれながら」直訳では「母の胎から」。この男の素性については知られていないが、「四十歳あまりの人であった」（4・22）といわれている。かかえられてきた とは、新改訳では「運ばれて来た」であり、成人してからかかえられてきたとしても20年あまりの歳月を運ばれ続けられてきたのであろうか。少なくとも、この男はここで体の癒しを望んでいる。

3 5 ここにおいては「見ること」に注目して黙想したい。

3 見て 見る、認める、気づく、といった、ごく普通の「見る」という言葉。

4 じつと見て バウアーは「緊張して何かに、あるいは誰かに視線を向けて見ること」と説明する。使徒行伝の別の個所では「にらみつけて」（13・9）と訳している。奇跡物語でよく用いられる言葉であり、ペテロの権能が宿った、力のこもった視線であった。

5 注目して 見つめて（新共同訳）、目を注いだ（新改訳）。しっかりと捉える、自分の力の中に保持する、というニュアンスを持つ言葉。何らかの精神的な働きに心を向けるという意味を持つ。

このように3〜5節には、それぞれ異なった「見る」という言葉が用いられており、それらの相違による登場人物の心の動きを思いめぐらすだけでもこの個所の黙想が豊かにされる。

6 金銀はわたしには無い ただ単に持ち合わせがなかったということもあるかもしれないが、2・44以下の、いわゆる私有財産の放棄ということも併せて理解することもできる。そして、その後に続くこの物語全体のピークへの序論ということもできる。イエス・キリストの名によって、歩きなさい この個所は、この物語全体の重要点である。後のペテロの説教の中で、ペテロは幾

度となく「名」という言葉を用いてこのしるしの本質を語っている(3・16、4・10、12)。ここでは、イエスの「名」とは、ただの記号ではなく、人を強くし、また救いうるところの「実体」である。まさに「イエス・キリスト」の実在そのものであるということができる。特にルカは「イエスの名」による奇跡を強調する。この名に救いがあるのである(使徒4・12)。キリストの名を呼ぶこと、その名を唱えることが意味を持つのである。この名に基づいて神が働かれるのである。使徒行伝は、この名に基づいて神が働かれた歴史である(3・6、4・7、10、12、30、10・43、19・13)。

7・8 ペテロは、ただ前節のように命じてそれっきりでなかった。彼は、自ら手を伸ばして彼の右の手を取って立ち上がらせたのである。ここは重要である。私たちは、み言葉を語りっぱなしであってはならない。み言葉を語ったならば、今度はそのみ言葉が成就するように行動しなければならないのである。もしペテロが彼の手を取って起こすことをしなかったらばどうであつたらうかと考えることも、説教を豊かにする秘訣である。しかし、ここで彼の体を立ち上がらせたのは、紛れもな

くイエス・キリストの「名」であることを忘れてはならない。

8 躍りあがって立ち、歩き出した 躍り上がるとは、雄鹿のように飛び跳ねる様子を描写しており、イザヤ35・6の預言の成就を示唆している。そして、**神をさんびしながら、彼らと共に宮にはいつて行った**物乞いをしていた男が祈る者とされたのである。この男の奇跡のクライマックスがここにおいて起こるのである。障がいを負っていた彼に対して閉ざされていた神殿に入るのである(レビ21・18・20)。癒された後、彼はもとの生活へと戻っていったのではなく、その生命が新しくされ、新たな生涯、祈りと賛美の生活が開かれたのである。イエスの「名」とは、ただ単に癒されたというにとどまらず、救いと新しい生命へと人々を招き入れる「名」なのである。

10 驚き怪しんだ 新共同訳では「我を忘れるほど驚いた」とあり、驚きの度合いがうかがえる。

参考図書 加藤常昭編訳「説教黙想集成3 書簡」(教文館)他

聖書

使徒3・1〜10

タイトル

イエス様からパワーをもらおう！

暗唱聖句

ナザレ人イエス・キリストの名によって
歩きなさい。 使徒3・6

目標

キリストによって力強くされる。

導入

(和田牧子)

みなさんのお家が停電になったことはありませんか。電気がストップしてしまうのです。先生のお家は去年の台風の時、丸一日停電になりました。困りましたよー。夜になっても部屋の電気がつかず、真っ暗です。あわてて懐中電灯を買いに行こうとすると、信号もストップしています。他の車の様子に注意しながら、おそろおそろ渡るようになってはなりません。他にも困ったことがいろいろありました。改めて電気の力の大切さがわかりました。

先週は、ペンテコステ礼拝でしたね。臆病であった弟子たちが変えられました。それは聖霊の力によるものでした。聖霊の力に押し出されて、弟子たちはイエス様を証しする人とされました。今日は、一人の男の人がある力によって変えられたお話です。

絶望の中にいる男の人

ある日、ペテロとヨハネが、午後3時にお祈りをするために、お宮に上ろうとしていました。そこに、一人の男の人がかかえられてきました。彼は生まれながらに足が悪く、一人では歩くことができませんでした。今のうちに車いすもあります。40歳位の人でした。ということは、約40年間、不自由な生活をしていたのです。働くこともできないので、お宮に来る人たちからお金をもらって生活をしていました。

もし、皆さんがこの人と同じ立場だったらどんな気持ちでしょうか？ ちょっと想像してみてください。おそらく彼は、「ぼくには何の希望もないな」。「人にお世話になっているばかりで、一生ここに座っているだけなのかな」と、自分の人生をあきらめていたのではないのでしょうか。

人生をあきらめ、希望がない生活…実はそのような生活を送っている人が、日本には今増えているのです。

力を与えられた男の人

この男の人がいつものように、そのお宮の「美しの門」に座っていました。そしてペテロとヨハネがお宮に入っていくのを見ているのを見て、お金をくださいとお願い

しました。多くの人が見て見ぬふりをする中、ペテロたちはちがいました。ふたりは、男の人をじっと見つめて「わたしたちを見なさい」と言いました。「何かもらえるのかな？」と男の人は期待したでしょうね。ふたりに注目しました。

しかし！ ペテロが言った言葉はこうでした。

「金銀はわたしにはない。しかしわたしにあるものをあげよう。ナザレ人イエス・キリストの名によって歩きなさい」。

それだけでなく、ペテロは男の人の右手を取って起こしてあげました。するとどうでしょう、足と、くるぶしがたちどころに強くなり、彼は踊りあがって立ち、歩き出したのです。そして彼はうれしさのあまり、歩き回ったり、踊ったり、からだ全部をつかって神様を賛美したのです。それから、ヨハネ、ペテロとともに、お宮に神様を礼拝するために入っていきました。

ペテロのお祈りをとおして、イエス・キリストの力がこの男の人に働いたのですね。イエス様は神様です。神様にできないことはありません。ペテロは聖霊に満たされ、イエス・キリストを信じる信仰によってお祈りしま

した。そのお祈りは聞かれ、歩けなかった人が、歩けるようになったのです。

イエス・キリストの名によって歩く

この男の人は、ペテロたちにお金をくださいと、お願いしました。でもいくらのお金をもらっても、それはすぐに無くなってしまいます。また次の日も同じように座っていることしかできません。ペテロはそのことを知っていて、「わたしにあるものをあげよう」と言いました。それは、イエス様によって足がいやされ、歩けるようになるということでした。これからは自分の足で歩き、自分の力で働いてお金を得ることができます。そして何よりも、この男の人もイエス様を信じて、生きるこ

結び

イエス様の力！ それは、わたしたちに生きる力を与えてくれます。つらいこと、悲しいことをいやす力があります。イエス様からの希望と愛が心にあふれてきます。イエス・キリストのお名前によってお祈りしつつ進んでいきましょう。

♪主のパワー♪ (GS 36)

聖書 使徒9・1～19 テーマ サウロの回心

序論

(金井信生)

イエスの復活をありえないことと否定し、これを伝えていたキリスト信者たちを迫害していたサウロは、 Damascus 途上でキリストに出会いました。サウロはこの時を人生の転機として、キリストとの出会いを証しし、イエス・キリストによる救いを宣べ伝える最大の伝道者と変えられました。

一、天からの光の経験

サウロは神に対して熱心な人でした。有名な律法学者であったガマリエルのもとで律法を厳しく教育され(22・3)、また厳格におきてを守って生活していました。それだけに、律法を越える教えを説いていたイエスに対して反発し、イエスの復活を事実として伝え、おきてを守り行うことなしに救いを宣べ伝えるキリスト信者たちに激しい怒りを覚えていました。それだけ自分の信じ行っているものが確かだと思っていたからです。

しかし、サウロの目の前に現れ、声をかけたのは主イ

エスでした。これまでイエスの復活を作り話と否定してきたサウロにとって、自分のよりどころとしてきた確信の方が空しいものであったことが明らかになったのです。

8章でエチオピアの宦官^{かんがん}は、聖書を読んでもわかりませんでした。正しい導きを受けて、すぐにイエス・キリストを信じました。反対に、パウロは聖書をわかっているつもりでしたが、神様の救いについて、またメシアについて間違った導きを受けていたために、イエスを否定してきました。しかし直接にキリストの語りかけを受けて、信じることができました。

その後サウロは、天からの光をもってイエス・キリストを中心として見定めて、聖書を読み直します。そして、学んできた聖書が、メシアの苦難による救いについて、行いではなく神の恵みによる罪の赦^{ゆる}しについてなど、イエスが救い主であることを示していることがはつきりとわかりました。また、み言葉に導かれて天からの光の中を歩む生涯に踏み出しました。

二、神の愛と赦^{ゆる}しの経験

目が見えなくなつて Damascus に手を引かれてきたサウロのもとを訪ねたのが、主の弟子アナニヤでした。当初

アナニヤは、主からサウロを訪ねるよう示されたとき、恐れていました。しかし、再度のお言葉を通して、神様がサウロを「救いの器」として選んでおられることを示され、出かけていきました。かつて「網を降ろしなさい」との主の言葉に従ったペテロは、大漁に驚き、主の弟子となりました。アナニヤも、「行け」との主の言葉に従ったところに、主の収穫があり、ご計画の確かさが現されました。

サウロは、主イエスの弟子の訪問に驚きましたが、それ以上に驚いたのが、本当なら許すことができない迫害者であり、自分を捕らえにきた男に「兄弟」と呼びかけて近づくアナニヤの姿です。サウロの目からうろこのようなものが落ちたのは、天からの光、キリストの言葉と共に、アナニヤの親しい語りかけのおかげでした。サウロは、「敵を愛し、迫害する者のために祈れ」(マタイ5:44)と自ら実践された主イエスの教えどおりに生きる人に出会い、愛と赦しが実現している、神の国の到来を見ました。

三、新しい人生の発見

サウロはアナニヤを通して、イエスの十字架と復活の

救いを信じただけでなく、神様の与えられた使命について知りました。「律法によつては、罪の自覚が生じるのみである」(ローマ3:20)と空しさを感じながらも突き進んできたパウロは、キリストに従う新しい人生を見出しました。それは自分を頼みとし、誇りとする生き方から、イエス・キリストを頼みとし、誇りとする生き方です。自分が神に愛され、赦されたように、人を愛し、赦し受け入れていく生活です。

サウロは生まれ変わりました。すぐに、イエスはキリストであると宣べ伝え始めます。後にパウロと名を変え、小アジア(今のトルコ)、ギリシャ、ローマに、さらに伝説によればスペインにも伝道しました。

迫害する側から迫害される側にまわり、様々な困難がありました。イエス・キリストによつて救われた感謝と喜び、またキリストに従って生きる確信は生涯失われることはありませんでした。

結論

主がみ言葉を通し、また人を用いて与えられる天からの光に照らされ、キリストを信じて新しくされた恵みに生かしていただきましょう。

研究資料

(小平徳行)

サウロ（パウロ）の回心と召命のいきさつは、使徒行伝に3回記されている（9、22、26章）。これは彼の生涯を根底から覆す一大転機となった。この出来事は初代教会の福音宣教史に欠くことのできない重要性を有している。

テキスト

1、2 なおも サウロによる迫害の様子については8・1、3に記されているが、その後サマリヤ伝道の記事で中断されていた。しかし彼による迫害は、その間も続けられていた。**主の弟子たちに対する脅迫、殺害の息をはずませながら**、どれほどキリスト者に対して激しい怒りに燃えていたかが分かる。やがてサウロはイスラエルの領内にとどまらず、国外に逃れたキリスト者を追跡しようとした（26・11）。**ダマスコの諸会堂あての添書**ダマスコはエルサレムから北北西に約240km離れたところに位置する。当時シリアの中心都市で、ローマの管理下にあり、ユダヤ人の住民が非常に多かった。これは、サウロがダマスコに逃げ延びたキリスト者を逮捕する権限

を得るためのもの。大祭司はユダヤ議会の議長としてユダヤ人に対する権能をローマ政府の承認のもとに持っていたが、国外においてもユダヤ人およびその社会に対して強い権力を認められていたのである。**この道の者**キリスト者に対する本書特有の呼び方（19・9、23、22・4、24・14、22）。それは初代教会が、主イエスに対する信仰を「いのちの道」「救いの道」と考えていたことを示している。

3 天から光がさして 時刻は真昼ごろであった（22・6、26・13）。この光は太陽よりも明るく輝き、主の栄光を示すものであった。この光はサウロの外側を照らしただけでなく、彼の内側を照らし、回心へと至らせ、迫害者を宣教者へと転向させることになった。

4、5 わたしは、あなたが迫害しているイエスである呼びかける声の主は復活されたイエスであった。キリスト者への迫害行為はとりもなおさずイエス・キリストに対する迫害行為であった。このことはキリストと教会が一体であることを示している（ルカ10・16）。教会が苦しむ時、イエスご自身も苦しまれているのである。

6 さあ立つて、町にはいって行きなさい これはサウ

口に対する配慮に満ちた命令であった。この時、サウロは急変した事態に十分に対処する能力を失っていたため、当座なすべきことだけを命じたのである。**あなたのなすべき事** キリスト者とは、自分のしたいことをするのでなく、キリストが望んでいることをする人である。

8 目を開いてみたが、何も見えなかった 神は人間に對し、しばしば、悪しき企てを止めたり、注意を引くために一時的に、目を見えなくすることがある(創世記19・11、列王下6・18〜20)。この時は、サウロに迫害をやめさせるためでもあったが、迫害者への処罰というよりも、サウロの回心と召命に深い内省を与えるための恵みの手段であったといえる。

9 三日間 断食は祈りの時であった(11)。この期間、サウロにとって、これまでキリスト者を迫害して、取り返しのつかない誤解と罪を犯してきたことについての悔い改めと、十字架につけられて死んだはずのイエスが復活したことについて深く考える機会となった。

10 アナニヤ 彼は「律法に忠実で、ダマスコ在住のユダヤ人全体に評判のよい」人であった(22・12)。この件以外では聖書に登場しないが、重要な使命を忠実に果た

したのである。

11 『真すぐ』という名の路地 この街路は今日もダマスコ東西に貫通する通りの一つとして現存し、言い伝えによれば、ユダの家はその西端の近くにあった。

15〜16 わたしの名を伝える器として、わたしが選んだ者である 主はサウロを宣教の器として聖別された。伝える(ギリバスタゾー) は「持ち運ぶ」が原意。

17 兄弟サウロよ サウロが迫害者であることを聞いていたアナニヤであったが、主の命令を受けて、兄弟としてサウロを歓迎した。キリスト者の愛と赦しを示す模範である。

18 サウロの目から、うろこのようなものが落ちて、元どおり見えるようになった この時、ただ肉眼が見えるようになっただけでなく、霊の目も開かれたのである。その証拠に、彼はキリストの名によってバプテスマを受けたのである。

参考図書 小野静雄「使徒の働き」『実用聖書注解』、斎藤篤美「使徒の働き」『新聖書注解・新約2』(以上のちのことば社)・I Howard Marshall, Acts (The Tyndale New Testament Commentaries) など

聖書

使徒9・1〜19

タイトル

サウロの回心

暗唱聖句

天から光がさして、彼をめぐり照した。

使徒9・3

目 標

天からの光に照らされ、キリストによる
新生の恵みに生きる。

導入

(土屋開夫)

先生は子どもの頃から、テレビの戦隊ヒーロー「〇〇レンジャー」が大好きでした。あのシリーズは、いつも番組の後半(半年後)ぐらいから必ず新しい仲間が加わって、大活躍するのです。今日のサウロさんもちょうどそのように、後からお弟子さんの仲間になりましたが、誰よりも大勢の人にイエス様の事を伝えました。そして新約聖書の中のたくさんの手紙を書きました。

そんな大伝道者のサウロさんは、なんと以前は教会の皆を苦しめる(迫害する)大迫害者、教会の敵だったのです！

以前のサウロさん

サウロさんは神様に従うことにおいて、誰よりも熱心

な人でした。そんな人が、なぜ教会のクリスチャン達を苦しめたのでしょうか？ それは、イエス様のことを「神の御子、救い主」だと信じていなかったからです。

「クリスチャン達は、ただの人間のイエスを、『神の御子だ、救い主だ』なんて言ってやがる！ とんでもない奴らだ。本当の神はこの天地を造られた神しかないのに。神を侮辱するクリスチャンは絶対にゆるせない！」

そんなふうに思っていたのです。私たちは、イエス様が本当の神様のひとり子であり、私たちと同じ人間になって下さった救い主である事を信じていますね。ところが、この時のサウロさんはその事を信じていなかったのです。絶対にそんな筈はないと思っていました。

つまり、心の目がまだ開いていなかったのです。心はまだ真つ暗闇の中にいたのです！ でもイエス様はそんなサウロさんを憐れんでくださいました。

イエス様の光に照らされたサウロ

サウロさんはクリスチャン達に対する憎しみと怒りに燃えて、まるで鬼のような、悪魔のような、恐ろしい顔つきをして、ダマスコという町に向かっていました。

ところがその道の途中、突然、物凄くまぶしい天から

の光に照られました！ ちょっと想像してみてください。どれくらいまぶしい光だったのでしょうか。サウロさんは思わず地面に倒れてしまいました。

その時、光の中から声がしました、「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか」。サウロさんは恐れながらも「主よ、あなたは、どなたですか」と聞くと、「わたしは、あなたが迫害しているイエスである」と答えがありました。なんとそのまぶしい光と声はイエス様だったのです！

サウロさんは本当にショックだったでしょう。今まで「イエスはただの人間だ。神でも救い主でもない！」と確信してきたのですから。ところが天からの光、イエス様の光に照らされ、神の御子であるイエス様に語りかけられてしまったのです！ 出会ってしまった以上、もう信じるしかありません。サウロさんは雷に打たれたような思いだったでしょう。

「イエスは本当に神の御子だった！ 私は間違っていた……とんでもない間違いを私は犯し続けてきた……！」
ここが大切ですが、イエス様の光は心の中を照らす光だという事です！ サウロさんはイエス様の光に心を照

らされ、今までの自分の罪と間違いが分かりました。そしてイエス様こそ、神の御子・救い主である事が分かりました。そして心の目が開かれ、体の目も見えるようになって、大迫害者から大伝道者に生まれ変わったのです！

まとめ

イエス様の光は、今も私たちの心を照らし続けます。ある人にとっては、雷のように激しくまぶしく。ある人にとっては、ロウソクの光のように優しく静かに。

どちらにしても、イエス様は今も私たちの心に「○○よ、○○よ」とみ言葉で語りかけられ、私たちの心を照らされます。そして私たちの罪と間違いに気づかせ、愛とゆるしを与えて、あなたを造り変えてくださるのです。お祈りしましょう、「イエス様、私の心をあなたの光で照らしてください。そして、いよいよイエス様を信じて従っていく者になってください。アーメン。」

♪わたしさえも愛して♪ (PW 27)

聖書 使徒16・6～10 テーマ マケドニアからの叫び

序論

(金井信生)

パウロの第二回伝道旅行は、行こうと思った方向が二度までも聖霊によってとどめられ、前には海しかないトロアスに導かれました。そこで見た幻によって、海を渡り、期せずしてヨーロッパ宣教の第一歩が記されることになりました。

一、行き場がなくなる時

第二回伝道旅行の目的は、第一回伝道旅行で生み出された小アジア地方の諸教会を訪問し、力づけるためでした。デルベ、ルステラと訪問しましたが、(アジアで御言を語れることを聖霊に禁じられたので)、西へ進み、北上しながら小アジア巡回に戻ろうとすると、(イエスの御霊がこれを許さなかった)ので、とうとう小アジアの西端、目の前はエーゲ海というトロアスに着いてしまいました(聖書地図参照)。

文字にすれば数行ですが、この間に一～二週間、あるいはそれ以上の時が経っていたと考えられます。「聖霊

に禁じられた」とはパウロが病気にかかっていたのではないかとの説もありますから、不安や恐れがあったかもしれないかもしれません。しかし、忍耐して主の導きを祈り待ち望むときが、次の大きなステップのために必要だったのです。

二、マケドニア人の叫び

トロアスでパウロは、ひとりのマケドニア人が(マケドニアに渡ってきて、わたしを助けて下さい)と懇願する幻を見ました。

パウロがこれまで想定していた伝道の対象ではない、海の向こう側の地域からの招きでした。しかしパウロは、神の招きと確信して、ただちにマケドニアに渡っていく決心をします。

そこには、「わたしにはまた、この囲いにいない他の羊がある。わたしは彼らをも導かねばならない」(ヨハネ10・16)、「あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう」(使徒1・8)など、主イエスのみ言葉の裏付けがありました。

また、救われるべきはすべての人ですが、(ひとりのマケドニア人)の救いを求める声に、パウロは応えていこ

うとします。マケドニア伝道において、ピリピではルデヤという婦人を導いてその家族も救われ、占いの霊につかれた女奴隷に解放を与え、獄屋に入れられますが、獄吏に「主イエスを信じなさい。そうしたら、あなたもあなたの家族も救われます」（使徒16・31）と福音を説きました。

主イエスも、その伝道は一人の悩みを聞き、苦しみに寄り添うものでした。「いなくなった一匹を見つけるまでは捜し歩かないであろうか」（ルカ15・4）と問いかけられたように、苦労や困難が伴うとしても、救いを求める声に応えることが主の御旨の内を歩むことであり、また主の御顔を仰ぎ続けることのできる道、主が共にいて力づけてくださっていることを実感できる生涯なのです。

三、確信に立つ生涯

マケドニアに渡り、ギリシア宣教を始めてからのパウロの働きについて、聖霊の導きを受けていたことが使徒行伝に何度か記されています。第三回伝道旅行の最後には、エルサレムに帰ったら捕らえられることも聖霊に示され、預言者アガボを通して人々からエルサレムに戻ら

ないよう涙ながらの勧告を受けますが、パウロの心は揺るがずに、主の導きだけに従っていきました。

私たちも、自分であれをしよう、ここに行こうとしているときは、楽しいかもしれませんが、思いがけないことで行き詰ると不安でいっぱいになります。

それよりも、主は私をどこに導こうとされているか祈り求めたり、また助けを求めている人、救いを必要としている人はいないか、耳を澄ましたり目を広く向けてみたらどうでしょうか。救いを求める声を聞くと、それは主が私たちを遣わすために届けられた招きの声であり、主から遣わされていく時には、少々の困難があっても、確信をもつて全力を尽くすことができます。

結論

聖書は、イエス様に救われ、共に歩んでくださっている幸いを知る者は、その喜びを伝える使命が与えられていることを教えています。

私たちの周りにいる、救いを求めている人々の声を聞き取り、イエス・キリストに救いがあることをお伝えする者となりましょう。

研究資料

(小平徳行)

宣教は神ご自身が導いて進めておられる。ここは福音が小アジアからヨーロッパ大陸に伝播されるに至った経緯が記されている。この出来事は「人の心には多くの計画がある、しかしただ主の、み旨だけが堅く立つ」(箴言19・21)という真理の実例であった。

テキスト

6 アジヤで御言を語ることを聖霊に禁じられた パウロ一行はガラテヤ州ルステラを出発し、アジヤ州に行き、その中心であるエペソを伝道活動の舞台にしようと計画していたが、聖霊によって禁じられた。それは、心のうちに与えられた衝動であったのか、一行の誰かによる預言的な言葉によったのか、あるいは、何らかの事情で計画通りに行かなかったことを聖霊による禁止と受け止めたのかもしれないが、定かではない。この時には禁じられたアジヤ伝道であったが、後に神はアジヤの地での伝道の道を開かれた(19・10)。フルギヤ・ガラテヤ地方フルギヤはガラテヤ州とアジヤ州に属している。この地

名はフルギヤとガラテヤの二つの地方を意味しているのではなく、ガラテヤ州のフルギヤ地方を指していると考えられる(ラムゼー)。

7 イエスの御霊がこれを許さなかった 禁じたのは6節では「聖霊」、ここでは「イエスの御霊」と表現の相違がある。具体的には何かは分からないが、先の場合とは異なり、イエス・キリストによる介入を意識させられる方法だったのかもしれない。いずれにせよ神がパウロ達を確実に導いておられることを示しており(10節)、この伝道旅行が人知を超えた確かな導きの中で進められていたことをルカは明らかにしようとしている。**ピテニヤ** 小アジア西北にある州で、文化水準の高いギリシヤ風の都市とユダヤ人居留地があった。ペテロは後にピテニヤに手紙を書き送っていることから(1ペテロ1・1)、神は後にこの地にも福音を宣べ伝えさせたことを知ることができる。

8 ムシヤを通過して、トロアスに下って行った 聖霊によって禁じられた結果たどりついたのは、予定外の地であるエーゲ海沿岸の港町トロアスであった。実にルステラからここまでの道のりは約700 kmであった。

9 これまでの一連の神の禁止は、積極的な導きに変わる。幻 幻や夢は当時、神が人間と意志の疎通を図るための手段として認められていた。使徒行伝ではしばしば幻によって宣教が展開して行ったことが記されている。幻によって、アナニヤがサウロの回心、召命のために用いられた(9・10～19)、ペテロとコルネリオを通して福音の扉がユダヤ人から異邦人へと開かれた(10～11章)。もし、これらの幻がなかったなら、キリスト教はユダヤ教の一派でとどまっていたかもしれない。このように幻は人間の固定観念を打ち砕き、神のみこころを悟らせるために用いられたのである。ひとりのマケドニヤ人 これがルカであったと断定する資料はない(そもそもルカは異邦人であるが、ギリシヤ人であったという確証はない)。しかし彼はトロアスの地でパウロと出会い、福音宣教に新しいビジョンを与えたという想像はあり得ないことではない。

10 神がわたしたちをお招きになったのだ パウロは即座にこの幻を、マケドニヤに福音を宣べ伝えるようにとの神からの招きであると解釈した。この時、ようやく二度も聖霊に禁じられた意味を理解できたに違いない。確

信して(ギリ)スンビバゾー) 元来「結び合わす」の意味である。9・22では「証明する」という意味で用いられている。この語はいろいろな証拠から一つの結論を引き出すことを表すのに使われる。未知の新しい大陸に出かけて行く事は冒険であったが、パウロにとっては、主から与えられた異邦人伝道という使命(9・15)と一致するものであった。わたしたち ここで突然、語り手が一人称複数形となる。本書ではこのような「私たち章節」がしばしば出てくる(16・10～17、20・5～15、21・1～8、27・1～28・16)。これは著者ルカが一行に加わり、彼が直接目撃した伝道旅行記をつづっている箇所であることを示している。ルカは、この時から医者として、パウロの伝道を助けるようになった。ただちに 神の御旨が分かったなら、即座に従うべきことを教えられる。

参考図書 小野静雄「使徒の働き」『実用聖書注解』、斎藤篤美「使徒の働き」『新聖書注解・新約2』、B・F・バックストン『バックストン著作集第10巻・使徒行伝講義 下』(以上のちのつとば社)、I. Howard Marshall, Acts (The Tyndale New Testament Commentaries) 他

聖書

使徒16・6～10

タイトル

マケドニアからの叫び

暗唱聖句

マケドニアに渡ってきて、わたしたちを助けて下さい。

使徒16・9

目標

救いを求めている人々を覚え、宣教への招きに応答する。

導入

(土屋開夫)

先週は、大迫害者だったパウロさんがイエス様の光に心を照らされて、イエス様が本当に神の御子・救い主である事に目が開かれたというお話でしたね。イエス様は本当に人を新しく造り変える事が出来るのです！イエス様ってスゴイですね。

「だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である。」とコリント人への第二の手紙にあります。これはパウロさんの気持ちそのままです。

異邦人の光パウロ

ところで「パウロ」という名前はユダヤの言葉での呼び方ですが、使徒行伝13章からは「パウロ」というギリ

シャ語の呼び方に変わっています。これからはユダヤの国を越えて外国に伝道に行くので、外国の呼び名の方がピッタリかも知れません。

そうです。パウロさんは船に乗って外国に住む人たちにイエス様を伝えに行く人になりました。全部で3回も伝道の旅をしたのです。どんな旅だったのでしょうか？風の吹くまま、気の向くまま、デタラメに旅をしたのでしょうか？いいえ、そうではありません。聖霊なる神様が、「あの人のところに行きなさい。この人のところに行きなさい」と、救いを求める人のいる所にパウロさん達を導かれたのです。

聖霊様の導き

パウロさんがシラスさんと一緒に二回目の伝道の旅をしていた時のことです。パウロさん達が西の方に伝道に行こうとすると、聖霊様が「そっちではありません」と言うかのようにストップをかけられました。次に北の方に進んでいくと、また聖霊様がストップをかけられました。パウロさんは「いったいどこに伝道に行けばいいのだろう？」と不思議に思ったかも知れません。

けれども間もなくして、聖霊様は夜の幻の中で教えてくれました。マケドニヤ人が「マケドニヤに渡ってきて、わたしたちを助けて下さい」とお願いする不思議な幻でした。パウロさんは「これは彼らに福音を伝えるために、神がわたしたちをお招きに聖霊様が教えて下さったのだ」とスグに分かりました。

マケドニヤは、西の方に更に海を越えて行く、遠くの町です。聖霊様の伝道のご計画はパウロさん達の思いを超えていました。でもパウロさん達はただちに従っていました。そこにはイエス様による救いを待っている人たちがいたのです。

主はボクらを用いてくださる

聖霊様はするようにパウロさん達を用いられました。イエス様の名前さえ一度も聞いた事の無いような人たちに、イエス様のことを教えてあげるためです！なぜなら神様は、全ての人がイエス様を信じて救われて欲しいと願っておられるのです。

皆さんはイエス様のことを色々知っていますね。まず①イエス様の名前。②イエス様が神の子だということ。

③イエス様は十字架で死なれたけれど、三日目によみがえられたこと。④イエス様を信じると罪がゆるされて、永遠の命をくださること。⑤イエス様は目に見えなくてもいつも一緒にいてくれて、とっても愛してくれること。⑥お祈りに応えて、色々助けてくれること。⑦死んでも天国に連れて行ってくれること。

ホラ、こんなに知っています。でも皆さんの周りにはイエス様を知らない人がいます。お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃん。そして同じ学校のお友達。たくさん居過ぎて、誰から教えてあげればいいのか分かりませんね。でも大丈夫、聖霊様が心に静かに教えてくださいます。「まず、あの子にイエス様のことを教えてあげて」って。まずはイエス様の名前を覚えてあげましょう。「へー、誰それ？」って言われるかもね。でも、不思議だけど「イエス様」の名前を言うと、みんな心のどこかでピクツと反応するんです。救い主のお名前ってスゴイですね。

♪主は僕らを用いてくださる♪ (PW59)

牧羊ひろば



天授ヶ岡教会 教会学校

●教会学校礼拝再開

教会学校の礼拝活動は二〇一四年ごろから開店休業状態となりました。その時間帯に、教会で結成したバンドの練習を行い、子どもが来れば対応しました。二〇一六年4月、現在の牧師が派遣されました。教会学校の時間帯に、牧師の子どもたち以外の子どもへの参加はありませんでした。しかし教会学校教師と10時半からの礼拝出席のため早めに来られていた数名の信徒がありましたので、ギターやベース、ドラムなどの楽器を使って、共に賛美していました。6月の第一日曜日に、天授ヶ岡幼稚園に通っている二組の母子が出席されました。お母さんがクリスチャンで、4月から天授ヶ岡教会の礼拝に客員として、ご家族で出席して下さっている方でした。もう一組は教会が初めて。それが教会学校礼拝の本格的な再開の契機となりました。

●教会学校の礼拝

幼稚園から小学生高学年までの子どもたちとお母さんを中心に、早めに来られた信徒の方まで、幅広い年齢層が対象です。教会学校の奉仕者は、牧師と教会学校教師として兄弟が1人、お手伝いとして青年が1人です。

賛美は、教区のティーンズ・バイブル・キャンプの歌集を使いました。教会が初めてのお母さんは、若い頃にバンドをしていたということで、早速演奏に加わってもらいました。今も喜んで演奏に加わってられます。天授ヶ岡幼稚園では一つの賛美を覚えるまで歌います。わ



小さな黒板を使って聖書の言葉を覚える。

かりやすい歌詞を繰り返し聞いて歌って覚えます。字を追って歌うことに慣れていません。ですから園児にとって、ティーンズ・バイブル・キャンプの歌集は結構難易度が高い。新聖歌の子どもの曲の方が早く覚えたりします。そういうこともあって、今は絵本や紙芝居のようにストーリー性のある曲、幼稚園で覚えた賛美歌、昔から子ども賛美歌も歌うようにしています。それもベースやドラムを入れて賛美します。教会学校に出席する園児は、知っている曲や覚えた曲は力一杯歌いますし、覚えていない曲や知らない曲であれば、走ったり踊ったりして曲に合わせてくれます。



クリスマスでの教会学校賛美。前に出るのが恥ずかしい子は写っていない所で歌っています。

お話しは、聖書絵本シリーズを読み聞かせ、そのお話しにちなんだ聖書の言葉に触れるようにしました。1年ほどでそのシリーズが終わり、次に聖書紙芝居シリーズを読み聞かせしました。絵本は昔の聖書紙芝居を芳香させる密度の濃い手書きでしたが、紙芝居はグラフィカルでシンプルな今時の絵柄。シンプルすぎてその一枚からアクションが伝わってこないのが惜しいところ。そこは補足しながら読み聞かせです。牧師が子どもだった頃、読み聞かせてもらった数々の紙芝居を復刻してほしい！と思いました。これも1年ほどでシリーズが終わりまし



紙芝居の読み聞かせ。

た。そして二〇一八年度から、教会学校教師の兄弟には牧羊者に従って、牧師は小さな子どもにも向けた聖書教理を、隔週でお話するようにしました。聖書教理は牧師のオリジナルです。もちろん様々な教理問答集も参考にしました。しかしそれを7分から10分くらいで、小さな子の記憶にとどめるにはどうするか？一緒に聞いているお母さんや他の信徒の方々の記憶にもとどめるにはどうするか？工夫とやりがいのある取り組みです。最大の目標は聖書の言葉が残ること。たとえば「神様について」であれば、「神は愛」「神は霊」「神は唯一」「神は真実」などです。小さな黒板に聖書の言葉と絵を描いてお話しします。みんなで声を合わせて何度も読みます。二週間後におさらいします。子どもは繰り返しが好き。何度も読み返しているとますます大きな声で読むようになります。自分が出した声を自分の耳に入れる。そうやって覚えるようにしています。

また二〇一八年5月に「教会学校について」という、小さな子にもわかってもらうことを目的とした教会学校の内容と礼拝の約束事を作成しました。子どもも大人もみんなで読み合わせました。「お話を聞く」を強調し

ました。教会学校の先生がお話ししても、小さな子がお話ししても、その人がお話しするなら、みんなでその人のお話に耳を傾ける。それがお互いを大切にすることだと。それ以降、子どもたちがざわつくことがあっても、その都度その約束事に立ち帰るようにし、礼拝に集中できるようにしました。



カフェスタイル礼拝では、小さな子どもたちも最初から最後まで礼拝に出席しています。普段の礼拝はメッセージ後の賛美から出席。

●教会学校のその他の活動

かつて、教会学校の礼拝出席数が減少していく中でも、夏のバーベキューやクリスマス会などの特別集会は行われていて、天授ヶ岡幼稚園の卒園児も含むたくさんの子どもが来ていました。二〇一二年からはクリスマス会の

みとなりました。二〇一六年以降特別集会は行っていない。二〇一八年には教会学校主催の秋の遠足で動物園に出かけました。教会に唯一ある従来型の集まりである「婦人会」が、二〇一八年度初めに食事会をしました。その時、「みんなどこかに行きたいね」という話になり、そこでいくつか候補があったので、教会学校で主催できそうな「動物園」を企画としていただきました。これからも教会で「こんなことしたいね」というアイデアがあれば、教会学校も積極的に関わっていきたいと願っています。いずれも教会全体に呼びかけ、どなたでも参加大歓迎としています。教会学校の礼拝もそうですが、子どもたちを中心にしていますが、どなたでも参加大歓迎のスタンスです。またイースター礼拝やクリスマス礼拝では、教会学校による賛美も行っています。

●天授ヶ岡幼稚園とのかかわりと今後

天授ヶ岡教会は天授ヶ岡幼稚園と共に歩んできました。現在、教会の信徒夫婦が、ドロシー・エレン・ホーア先生や福田八重先生といった草創期の先生のスピリットを引き継いで働きを進めておられます。毎日幼稚園か

ら子どもたちの元気な賛美とお祈りが聞こえてきます。牧師は幼稚園の理事に加わり、始園式や卒園式では式辞を述べ、花の日礼拝や収穫感謝祭は教会堂で行われ、運動会では牧師が開会祈祷、クリスマス祝賀会では園児や卒園児、ご家族の前で牧師がメッセージをします。日頃は幼稚園の子どもたちが帰った後、有志の方々がサッカークラスや空手教室、体操教室やゴスペル教室、英会話やピアノ教室が主催され、年配の方々向けの脳活教室や唱歌教室まで行われています。まさに地域のあらゆる世代に開かれた幼稚園です。地域との関わりと伝道のために様々な教会で様々な取り組みがなされていますが、ここでは幼稚園がそれに似たあらゆる働き窓口になっています。なんと大きな教会学校だろうと思います。また、時代の流れで、認定こども園への移行が行われようとしています。子どもとその家族のニーズの広がりへ対応が迫られています。老朽化と新体制移行に伴い、新園舎の建設も必要となっています。草創期の先生方のスピリットを継承しつつ、次の時代にふさわしい幼児教育のあり方を模索しておられます。

そんな中で教会は何かができるか？ 考えさせられ祈ら

されています。あらゆる働きを受け皿となっている幼稚園と共に、次の時代を見据えた教会の働きにどんな可能性があるだろうか？一つは幼稚園に子どもを送迎しているご家族の憩いの場、交わりの場とならないだろうか？ということです。教会堂も幼稚園園舎と共に老朽化しています。教会が誕生して70年を迎えました。これを機に、神様のこれまでの導きを感謝しつつ、これからの導きを期待し、次の時代にふさわしい教会の姿を、教会員一同共有し、形にしていきたいと願っています。

(内田 純)



教会学校主催の遠足（動物園）。



幼稚園の花の日礼拝。



幼稚園の収穫感謝祭。

● 受難・復活

行事

テーマ

聖書

暗唱聖句

4月7日	進級式	十字架での祈り	ルカ 23・32～38	同 34 節
14日	棕櫚の日	十字架による救い	ルカ 23・39～43	同 43 節
21日	イースター	よみがえられたキリスト	ルカ 24・1～12	同 3 節
28日		エマオへの道	ルカ 24・13～32	同 31 節
5月5日		キリストの証人として	ルカ 24・44～53	同 48 節
12日	母の日	ルツ	ルツ 1・15～18	同 16 節

新しい生き方

ヨハネ 13・34

● 新しい生き方

5月19日	神の子として	Ⅰヨハネ 5・1～5	同 1 節
26日	神の家族と共に	エペソ 2・19～22	同 19 節
6月2日	愛によって	ヨハネ 13・34～35	同 34 節

● 教会の歩み

6月9日	ペンテコステ	ペンテコステ	使徒2・1・6 414	同1・8節
16日	父の日	キリストの名 による歩み	使徒3・1 10	同6節
23日		サウロの回心	使徒9・1 19	同3節
30日		マケドニア の叫び	使徒16・6 10	同9節

二〇一九年度カリキュラム解説

今年度は、三年カリキュラムの最終年となります。以下、今年度カリキュラムの概略についてご紹介致します。なお、今年度カリキュラムや三年分の新カリキュラムは、教会教育室ホームページからダウンロードして頂きます。適時ご利用ください。

①新約聖書

新約聖書からは、年度初め、ルカによる福音書から単元「受難・復活」を学びます。前年度カリキュラムの最後の単元「キリストの十字架への道」に続く形となっています。また、使徒行伝から、単元「教会の歩み」、ヨハネの黙示録から単元「黙示録」、ヨハネによる福音書からは単元「キリストの宣教」及び「キリストの十字架への道」を学びます。

②旧約聖書

旧約聖書からの学びは、単元「預言者」で、列王紀からエリヤ、エリシャ、また、預言書からはヨナ、エレミヤ、ダニエルについて学びます。単元「出エジプト」は、

タイミングを年頭に合わせての学びです。

③教会暦・年間行事によるカリキュラム

今年度初めには、新約聖書単元と教会暦単元兼ね合わせて、単元「受難・復活」が置かれます。（母の日の主日には、ルツ記を学びます。）また、年末には、収穫感謝の日を含め、単元「クリスマス・年末」が置かれます。

④テーマ「新しい生き方」（ヨハネ13・34）

今年度のテーマは、「新しい生き方」です。テーマに基づく単元として、単元「新しい生き方」を設けました。前年度はテーマを「キリストの救いを知る」としましたが、キリストの救いを頂いた者が新しい生き方へと進むことができるよう、祈りつつ備えて頂ければ幸いです。

【お知らせ】今年度より、付録の「み言葉カード」

に、今までの口語訳に加えて、新改訳第三版、新改訳2017、新共同訳、聖書協会共同訳を用意しました。教会教育室ホームページより無料でダウンロードできます。著作権表記はそれぞれに明示させていただきます。

『牧羊者』のご購読・ご利用について

* 分級用に、ワークA(幼稚園向け)、B(主に小学生1～3年生向け)、C(主に小学生4～6年生向け)を用意しています。また、付録として「子ども聖書日課」、「フラッシュカード」、「中高科へのヒント」があります。いずれも、下記ホームページから無料でダウンロードできます。送付ご希望の方には、ワークは各600円+税でお送りします。
信徒局 教会教育室 ホームページ
<http://cs.jccj.info/>

* ご注文は、日本イエス・キリスト教団(事務局)まで。申込み、部数変更等のための用紙も、上記ホームページからダウンロードできます。
神戸市兵庫区塚本通3-3-19
電話 (078) 575-5511
FAX (078) 575-6611

【お詫びと訂正】二〇一八年度第IV巻85頁「目標」の「キリストの身代わりの十字架による罪の赦しを受け取る。」で後半が欠落していました。お詫びして訂正します。

おわりに

『牧羊者』二〇一九年度第I巻をお届けできますことを感謝します。また、執筆者のご労苦に感謝いたします。

巻頭言は塩尻教会の佐伯修一師に、教師養成講座は教団異端・カルト研究室長の小岩裕一師にそれぞれ執筆してい

たきました。「牧羊ひろば」は天授ヶ岡教会のCSを紹介していただきました。

今号の執筆者、奉仕者を紹介いたします。

聖書講解	石田高保師	小泉 創師	福井文彦師
研究資料	水川武志師	金井信生師	高橋頼男師
	宮澤清志師	小平徳行師	辻井和己師
	金井由嗣師	加藤 満師	中島啓一師
メッセージ例	松浦みち子師	飯田勝彦師	土屋開夫師
	後藤 真師	和田牧子師	
ワーク(A)	鎌野 幸師	吉田美徳師	宇野真佑美師
(B)	山下大喜師	三輪直子師	竹崎光則師
(C)	上森恭子師	田中裕明師	勝田幸恵師
中高科へのヒント	後藤健一師	三輪正見師	八幡直人師
子ども聖書日課	田中愛子師	金田ゆり師	小野淳子師
フラッシュカード	丹羽 遥姉	松浦あん姉	佐藤由香姉
言葉カード・イラスト	後藤栄子師	加藤 満師	後藤栄子師
ワーク打ち込み	松浦あん姉	佐藤由香姉	加藤 満師
多田豊子師			
校 正	加藤 清師	中島啓一師	

また、事務作業・発送の教団事務所の兄姉、印刷の松木共栄印刷、菱三印刷に心から感謝いたします。(中島啓一)

聖書教育教案誌 牧羊者 二〇一九年度 I巻

二〇一九年四月一日発行

発行所 日本イエス・キリスト教団
企画監修 日本イエス・キリスト教団 信徒局 教会教育室
神戸市兵庫区塚本通三三一九
電話 (078) 575-5511
FAX (078) 575-5511
印刷所 菱三印刷株式会社
電話 (078) 575-5511
* 日本聖書協会『口語訳聖書』使用許諾済み